

(4) 菌類

概説

a. 菌類の特徴

古く生物界を動物と植物に区別していた時代には菌類は植物に含められていた。そのなかで被子植物・裸子植物・シダ類を高等植物（維管束植物）とし、菌類は蘚苔類・藻類・地衣類とともに下等植物として取扱われた。しかし、葉緑素をもたず有機物を生産することのできない菌類を植物の仲間として取扱うことは、自然界の物質循環を理解するうえで支障となる。そこで生物の三界説の提唱となって有機物の生産者（植物）、消費者（動物）と並んで有機物の分解・還元者として菌類の役割が広く認識されるに至った。最近の定義によれば菌類（狭義）はツボカビ、接合菌、子のう菌、担子菌の4門と生活環の一部不明な不完全菌に分類され、ほかに変形菌、ネコブカビ、卵菌など偽菌類とよばれる一群もある（杉山, 2005）。

一方、菌類の便宜的区分として大形菌類、微小菌類の呼称がある。前者は主として担子菌、一部子のう菌のうち肉眼で認めうる比較的大形（cm ないし mm 単位）の子実体を形成するもので、いわゆる“キノコ”の仲間、後者は接合菌、大部分の子のう菌や不完全菌のほか、一部担子菌のうち顕微鏡的サイズ（およそ 1mm 以下。単位は $\mu\text{m} = 1000$ 分の 1mm）の子実体を形成するもので、いわゆる“カビ”や“コウボ”の仲間である。このように菌類はおおむねキノコ・カビ・コウボに分けられるが、明確な境界がある訳ではない。

菌類の生息の場、すなわち分解・還元の対象となる有機物を基質という。自然界には植物あるいは動物に由来する、生体（組織）から死体（組織）まで様々の段階の基質があって、それぞれ特有の菌類の住み処となる。基質と菌の関係から寄生菌、殺生菌、腐生菌、共生菌などの呼称が生まれた。菌類の栄養吸収、生長をつかさどる生活体は菌糸、繁殖・変異・分散の役割をになうのが孢子、孢子を形成する器官が子実体である。

b. 青森県における大形菌類（キノコ）研究史

神潔は「青森博物研究会会報」第2号（1935）掲載の「十和田湖・八甲田山付近のキノコ類」の中で酸ヶ湯付近から43種、蔦温泉付近で63種、十和田湖付近で18種のキノコを採集・記録した。神はさらに同会報3号の「弘前附近に産する茸類」（1936）では岩木山麓百沢付近で26種、沢田苗圃付近で29種を記録、同会報第4号（1937）の「下北半島に茸を探るの記」で、旧大畑町から旧川内町への縦断途中において採集した茸85種を記録した。

土岐晴一は1941年から1957年まで農林省林業試験場に勤務した。青森県でも採集を行い、成果を今関六也と共同で発表した。例えば、アカハテングタケ *Amanita rhodophylla* Imazeki et Toki は青森県八甲田山で土岐が採集した標本に基づき記載された。

大谷吉雄（1956）は「青森林友」第89号の「八甲田山麓菌蕈類採集記録」の中で25種のキノコをそれぞれ写真および顕微鏡観察図とともに報告した。

成田傳蔵は長年にわたって県産きのこの種類および生態の調査を続けた。「青森県生物学

会誌」第1巻(1956)および同誌第2巻(1958)に発表の「青森県産のきのこ類」では、合計114種のキノコが同定・記録された。このリストは同誌第27巻(1990)の「青森県産キノコ目録」では合計631種と大幅に増え、この間の青森県におけるキノコ研究の著しい進歩がよく現われている。また「青森県のきのこ」(1983)をはじめ数冊のキノコ図鑑を著わして積極的にキノコの知識の普及と後進の育成に努めた。

県内のキノコ研究者の連携と一層の学術的研究を目標に青森県きのこ会が1988年発足した。会長は初代成田傳蔵、1990年から2002年は工藤晃、2003年以降は工藤伸一である。1989年以降「青森県きのこ会会報」を発行し、県内の菌類調査に大きく貢献した。「青森のきのこ」(1998)は同会のメンバーを中心に幅広い協力によって完成したもので、学術的にも高く評価されている。

c. レッドデータ 菌類の種選定の経緯

青森県における大形菌類(キノコ)の分布と生態に関する知見は「青森県のきのこ」(1983)、「続青森県のきのこ」(1985)、「青森県産キノコ目録」(1990)、「青森のきのこ」(1998)などの出版によって年々着実に増加した。また「青森県史 自然篇 生物」(2003)で執筆項目に菌類が取上げられたことも県内の菌類フロラ研究を大いに推進した。一方で、各都道府県単位のきのこ図鑑がほぼ出揃ったことに加え、環境庁編「レッドデータブック 植物(維管束植物以外) 蘚苔類・藻類・地衣類・菌類」(2000)(以下国のRDBと略称)および日本菌学会東北支部編「東北のキノコ」(2001)の出版によって、わが国の菌類フロラにおける青森県の特徴が次第に鮮明になってきた。これらの経過を踏まえ、青森県生物多様性保全対策検討会では2004年にレッドデータリスト 菌類の新規作成が企画された。この原案作成には前記青森県きのこ会の多大の協力があった。原案に基づき2005年には県内のキノコ研究者10余名の協力のもとにモニタリング(現地調査)を含め資料収集が行なわれた。同年末、資料の整理・分析が行なわれて、最終的に県内の希少大形菌類70種がそれぞれのランクとともに確定された。現在青森県内で確認されているキノコは約700種と見積もられているので、そのおよそ10%に当たる。

なお、微小菌類(カビ・コウボ)についてはまだ県内の調査が不十分なため、今回は種選定の対象とされなかった。

d. 成果と今後の課題

選定70種をカテゴリー別に見るとAランク...2種、Bランク...11種、Cランク...27種、Dランク...30種である。すなわち絶滅の危機に瀕している(Aランク)あるいは絶滅の危険が増大している(Bランク)と判定された種は全体の約2割、一方、生息・生育を存続する基盤が脆弱(Cランク)あるいは、生息・生育情報の不足(Dランク)と判定された種が約8割である。特にDランク判定が30種に及ぶことは、本県の菌類フロラの調査がまだ不十分なことを示している。Aランク判定のヤチヒロヒダタケの発生は現在本県に限られて

おり、国のRDB(2000)には取上げられていない。コカンバタケは同RDBで絶滅危惧類とされ、冷温帯分布系の種であることから本県でも一層の注意を要する。

国のRDBで絶滅危惧(, 類)と判定されているエビタケ・タマチョレイタケ・ツヤナシマンネンタケ・ムカシオオミダレタケ・クチキトサカタケ・ツキヨタケは本県でやや普通である。これらは主にブナ林やミズナラ林にみられるもので、本県ではまだこれらの林が他県に比べよく保存されていることが背景にある。

今回の種選定において分布上北方系・南方系要素の混在が注目された。北方系としてはヤチヒロヒダタケをはじめヤマドリタケ・ドクヤマドリなど、南方系としてオニテングタケ・ヒトクチタケなどがあげられよう。日本特産のキツネノサカズキ・オドタケ・クチキトサカタケの発生も貴重な記録である。

生息地・基質の面から見ると、菌根菌(地中で菌糸が生きた植物の根と関係しているもの。例：バカマツタケ・ホンシメジ・ホンショウロなど)と材腐朽菌(菌糸が落枝、倒木、立木の枝幹、根株などの腐朽に関係しているもの。例：シロキツネノサカズキ・シロタモギタケ・カバノアナタケ・シロマイタケなど)が多くを占め、その他林内地上(オオミノミミブサタケ・オオズキンカブリなど)、草地(トガリフカアミガサタケ・ウスムラサキガサ)などである。いずれにしても多様な植物を育む自然環境が菌類の最適の生息地であるといえよう。本リストの菌類を自然保護・環境評価上の1つの指標としてその消長を注意深く見守る必要がある。

(原田幸雄)

引用文献：

- 青森県史編さん自然部会 2003, 菌類(キノコ・カビ)の多様性. 青森県史 自然篇 生物, p101-144 .
- 今関六也・土岐晴一 1955, 日本産マツダケ目菌類についての新知見(1). 林試研報, 79, p1-12, pls. 1, 2.
- 神 潔 1935, 十和田湖・八甲田山付近のキノコ類. 青森博物研究会会報, 2, p54-62 .
- 神 潔 1936, 弘前付近に産する茸類. 青森博物研究会会報, 3, p44-49.
- 神 潔 1937, 下北半島に茸を探るの記 4. 青森博物研究会会報, 4, p31-40 .
- 環境庁 2000, 改定 日本の絶滅のおそれのある希少野生生物 植物 (維管束植物以外) . 自然環境研究センター, 429pp.
- 工藤伸一・手塚 豊・米内山宏 1998, 青森のきのこ. グラフ青森, 289pp.
- 成田傳蔵 1956, 青森県産のきのこ類 I. 青森県生物学会誌, 1 (1), p9-4 .
- 成田伝蔵 1958, 青森県産のきのこ類 II. 青森県生物学会誌, 2 (1, 2), p12-15.
- 成田伝蔵 1983, 青森県のきのこ(増補改訂版). 東奥日報社, 404pp.
- 成田伝蔵 1985, 続青森県のきのこ. 東奥日報社, 227pp.
- 成田伝蔵 1990, 青森県産キノコ目録. 青森県生物学会誌, 27, p1-25.
- 日本菌学会東北支部 2001, 東北のキノコ. 無明舎, 280pp.
- 大谷吉雄 1956, 八甲田山麓菌茸類採集記録. 青森林友, 89, p1-23.
- 杉山純多 2005, 菌類・細菌・ウイルスの多様性と系統, 裳華房, 492pp

本文

ハラタケ目キシメジ科

A

和名 ヤチヒロヒダタケ

環境省：該当なし

学名 *Armillaria ectypa* (Fr.:Fr.) Emel

[形態的特徴] カヤタケ型をした、柄につばのない中型のきのこである。傘は径2.5～10cm、初めまんじゅう形、のち開いて平たい丸山形～ほぼ平らとなり、ときに縁部で多少反り返える。しばしば低い中丘を有するが、ときにこれを欠く。縁は初め内側に巻き、傘が開いたものではしばしば多少波打つ。表面は湿時多少粘性があり、縁に明瞭な条線を表す。中央部は暗黄褐色～暗褐色の厚着した微細な繊維状鱗片が密生し、幼時全体に黒褐色を帯びるが、傘が開くにつれ中央部を残してあめ色～淡黄土色となる。ひだは直生または多少湾性、ときにやや垂生し、類白色～淡黄色、やや疎でしばしば2分岐する。柄は長さ5～10(～19)cm、幅は頂部付近で3～9mm、基部で1～1.8cm、根もととはこん棒上に膨らみ、しばしば紡錘状を呈する、内部の質は軟らかく、成熟するとしだいに中空になる、表面は繊維状、傘とほぼ同色、上方では淡色、基部はしばしば白色から淡黄色の菌糸で覆われるが、根状菌糸束をつけない。胞子紋は淡クリーム白色。胞子は楕円形～卵形～長楕円形～涙滴形、無色、大きさ7～11×5～7.5μm、平滑。

[選定理由] 世界的に発生が稀で、その生態が学術的に極めて貴重なものである。日本では群馬県尾瀬から報告されたが(Kobayasi, 1954)、現在、発生が確認されているのは本県だけである(工藤・長沢, 2003)。

[分布と生態の概要] 日本とヨーロッパに分布し、ヨーロッパではアルプスの高山帯や北部高緯度地域の湿原に発生する。本県では秋、休耕田のようなヨシなどの茂る湿地に発生する(工藤・長沢, 2003)。

[生存に対する脅威と保存対策] 湿地の減少や休耕田の開発などにより生育条件が悪化している。特に本県における発生地である休耕田は近年宅地化が急速に進んで、絶滅の危機が逼迫している。今後、世界的視野からも発生地の保存が望まれる。

[特記事項] ナラタケ属に所属するが、柄につばはなく、湿地に発生する特異な性質を持っている。類似種に同じくつばを欠くナラタケモドキ *A. tabescens* (Scop.) Emel があるが、こちらは枯木などに生えることと、傘に粘性がないことで区別がつく。

(原田幸雄・工藤伸一)

ヒダナシタケ目サルノコシカケ科

A

和名 コカンバタケ(ヒメカンバタケ)

環境省：絶滅危惧 類

学名 *Piptoporus quercinus* (Schrad.:Fr.) Karst.

[形態的特徴] 枯木などの材に発生するものでは傘の径 10～20cm、通常半円形～扇形で短い側生の柄をつけるが、地中に埋もれた基質から発生するものではしばしば径 35cm を超える円形の傘を形成し、中心に幅 3cm 程度、長さ 10cm 程度の太い黒褐色の柄をつける。傘表面は淡褐色～褐色、最初ピロード状のちほぼ平滑または細かい粒を帯びる。肉は肉質で厚く弾力に富み、厚さ中央で 2～3cm、縁に向かって薄く、類白色。孔口は小形、最初類白色、傷つけると褐変する。管孔は短く、1～2mm。胞子は長楕円形～やや紡錘形、無色、大きさ 5.5～7(～8)×2～2.5μm、平滑。傘の菌糸は厚壁細胞からなる。褐色腐朽菌。

[選定理由] 国の絶滅危惧種(CR+EN)に指定されており(環境庁,2000) 採集記録は極めて少ない。

[分布と生態の概要] 本県のほかに静岡県、鳥取県で採取の記録があるとされている(環境庁,2000)が、発生が稀で、分布等の正確な情報は不明である。本県では、初秋、ミズナラの枯木上およびクリの根際に発生することが確認されている。

[生存に対する脅威と保存対策] 本県における発生地はクリ・ミズナラの天然林という限定された地域である。発生は全国的にも稀であり、今後環境の改変によっては絶滅が危惧される種であり、自然林の保護が望まれる。

[特記事項] 原貴子によって 1998 年に田子町のクリ・ミズナラの天然林内で初めて採取された後、同地区も含め採集記録はない。ヒメカンバタケの別名があり、どちらも和名は「小形」を意味するが、本県から採取されたものでは、極めて大形になることが確認されている。同じ仲間のカンバタケ *Piptoporus betulinus* (Bull.:Fr.) Karst.はカバノキ類に発生し、肉質が強靱で、孔口も変色しない点で違いがある。日本産のきのこは学名の基礎となったヨーロッパ産のものと異質の可能性があり、今後学名の検討が必要である。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目テングタケ科

B

和名 コササクレシロオニタケ

環境省：該当なし

学名 *Amanita squarrosa* Nagasawa et Hongo

[形態的特徴] ウラベニガサ型をした小～中形の白いきのこである。傘は径3～6cm、初めまんじゅう形からのちほとんど平らに開き、表面に綿質な角形の鱗片を多数散布する。鱗片は傘の中央部ではいぼ状、全体ほぼ白色、やや脱落性。肉は白色。ひだはほとんど離生し、白色、密。柄は長さ10～12cm、幅は1～1.2cm、基部は紡錘状に膨らみ、中実。柄の下半部には、反り返ったうろこ状のささくれが輪状につくが、上方に向ってささくれは小形不明瞭となる。つばは綿質、早落性。胞子は類球形8～10×7～9μm、アミロイド。

[選定理由] 過去に青森市内のミズナラ雑木林で発生が確認されている（工藤ほか, 1998）ものの、その後の発生が確認されていない。

[分布と生態の概要] 全国的に発生が稀で、分布等の情報が不明。本県では初秋、ミズナラ雑木林内での発生が確認されている。

[生存に対する脅威と保存対策] ミズナラ雑木林の伐採や雑木林の放置などによって発生環境が悪化しており、良好な里山二次林の保存が望まれる。

[特記事項] 本県では青森市から初めて採集されたが、以後採集記録はない、似た仲間のササクレシロオニタケ *Amanita cokeri* (Gilb. et Kuhn.) Gilb. f. *roseotincta* Nagasawa et Hongo はより大形で、傘の中央が淡褐色を帯び、鱗片が硬く脆い点で違いがある。

（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目イグチ科

B

和名 ヤマドリタケ

環境省：該当なし

学名 *Boletus edulis* Bull.:Fr.

【形態的特徴】 傘は径 6～16cm、初め半球形、のち開いて丸山形から平たい丸山形、表面は無毛平滑、湿ると多少粘性をおび、色は栗褐色～淡茶褐色。肉は厚く、緻密、白色、傘および柄表皮下では淡褐色を帯び、空気に触れても変色しない。管孔は初め直生のち上生～ほぼ離生、初め淡黄色のち帯黄緑褐色となり、孔口は円形、小形、初め白色の菌糸でふさがれる。柄は長さ 8～12cm、幅 2～3cm、倒こん棒形、表面は淡褐色の地に白色のやや細かい網目模様があってほぼ柄の中央より多少下まで達し、それより下方では不規則、柄の部分の肉は緻密で極めて堅い。胞子は長楕円形～類紡錘形、大きさ 13～16×4.8～5.5 μ m、平滑。シスチジアは紡錘形、大きさ 40～50×8～10 μ m。傘の表皮は幅 4～5.5 μ m の菌糸からなる。

【選定理由】 発生環境が林相によって限定されているため発生場所も限られており、発生も比較的稀である。

【分布と生態の概要】 国内では本県以外に北海道から発生が知られており、針葉樹（主にトウヒ属）の樹下に発生するといわれている。本県では夏～秋、エゾマツの樹下に発生し、八甲田から採集されている（工藤, 2005）。

【生存に対する脅威と保存対策】 本県のエゾマツ林は地域が限定されており、環境の変化によっては絶滅が危惧されることから、エゾマツ林の保存が望まれる。

【特記事項】 本種はこれまで本県と北海道からのみ確認されている。国内では本種に類似している種がいくつかあり、しばしば混同されている。特にヤマドリタケモドキ *Boletus reticulatus* Schaeff. は最も類似しているが、その傘の表面が幼菌でははじめピロード状であること、柄の網目模様が下部まで明瞭である点で違いがある。

（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目イグチ科

B

和名 ドクヤマドリ

環境省：該当なし

学名 *Boletus venenatus* Nagasawa

【形態的特徴】 傘は径 10～20cm、初め半球形～まんじゅう形、のち開いて丸山形となり、幼時縁部は内側に巻く。表面は淡黄褐色でややピロード状の感触があり、粘性はない。管孔は上生し、初め鮮黄色のち黄褐色から汚黄褐色となる。孔口は微小、管孔と同色、傷をつけると青く弱く変色する。柄は長さ 12～20cm、幅 3～4cm、下部に向かって太まり、表面は幼時ほとんど白色で基部は帯黄色、のち汚黄色～淡黄褐色となり、赤褐色点状のしみができる。肉は黄色、刃物で切断すると緩やかに弱く青変する。胞子は紡錘状長楕円形、13～16×4.5～5μm。

【選定理由】 発生状況が林相によって限定され、発生も比較的稀である。

【分布と生態の概要】 本州の亜高山地帯及び北海道の針葉樹の樹下で発生が知られている。本県では夏～秋、エゾマツの樹下に発生し、八甲田から発生が確認されている（工藤, 2005）。

【生存に対する脅威と保存対策】 本県のエゾマツ林は地域が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧されることから、その保存が望まれる。

【特記事項】 Nagasawa（1995）の記載によると、肉は空気に触れると青く変色するとされている。本県産では刃物で切断したときは弱い変色性が見られるものの、手で裂いたときなどは変色は見られない。有毒種である。

（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目キシメジ科

B

和名 バカマツタケ

環境省：該当なし

学名 *Tricholoma bakamatsutake* Hongo

【形態的特徴】 キシメジ型をした中形のきのこである。傘は径 4～10cm、中央部はくり褐色、周辺部は淡色～ほとんど白色、初め繊維状、のち表皮は裂けて鱗片となる。肉は白色、緻密、特有の香気がある。ひだは湾生し、白色、密、古くなると褐色の染みができる。柄は長さ 6～10cm、幅 1.2～1.6cm、上下同大か、やや根もとが太く、中実、表面のつばより上は白色粉状、下部は傘と同様の褐色繊維状鱗片に被われる。香りはまつたけに似てさらに強い。胞子紋は白色。胞子は類球形～広楕円形、無色、大きさ 5.5～7×4.5～5.5μm、平滑。

【選定理由】 開発によるミズナラ雑木林の伐採など、発生環境の悪化により近年大幅な発生減少の傾向が見られる。

【分布と生態の概要】 本県における発生時期は夏～秋で、里山のミズナラ、カシワなどの雑木林に発生し、しばしば菌輪をつくる（工藤ほか, 1998）。

【生存に対する脅威と保存対策】 ミズナラなどの雑木林の伐採や放置などによって発生環境が悪化しており、良好な里山二次林の保存が望まれる。

【特記事項】 本種は青森県産標本に基づき新種記載された（本郷, 1974）。

（原田幸雄・工藤伸一）

ヒダナシタケ目サンゴハリタケ科

B

和名 フサハリタケ

環境省:該当なし

学名 *Creolophus cirrhatus* (Pers.:Fr.) P.Karsten

[形態的特徴] 貝殻形をした傘の裏に針のある、中形のきのこである。傘は半円形～貝殻形で、大きさ6～10×4～8cm。通常数個の子実体が基部で癒着して重なり合う。傘の表面は長さ1～3mm、ときに5mmほどの粗い毛よりなる突起で被われ、白色～クリーム色、のちに淡橙褐色を帯びる。子実層は針状、針は長さ5～15mmで傘表面と同色。肉は白色で、厚さ1.5～3cm、質は軟らかくて弾力性に富む。傘の肉及び子実層托実層は一菌糸型で、非アミロイド。胞子は広楕円形、無色、3.2～4×2.4～3.2μm、平滑、アミロイド。子実層にはグレオシスチジアが存在する。

[選定理由] 本種は世界的に分布地域の限定された貴重種である。本県においては過去に発生が確認されているものの、発生は稀で、その後2002年まで10年以上発生が確認されていなかった。

[分布と生態の概要] 本種は北ヨーロッパやアメリカ西部などで発生が知られているが、国内では1990年に八甲田から初めて見つかったきのこである。本県以外ではこれまで宮城県、埼玉県、大分県で採集されている。本県では秋、ブナの倒木に発生し、八甲田と奥入瀬溪流沿いで確認されている。

[生存に対する脅威と保存対策] 発生場所が限定されており、十数年ごとにしか発生が確認されていない。環境の変化によっては絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

[特記事項] 1990年に八甲田で採集された標本に基づいて日本新産種として報告された(長沢・工藤,2003)。類似種にブナハリタケ *Mycoleptodonoides aitchisonii* (Berk.) Mass G.があるが、肉は比較的薄くて傘の下面の針は短く、上面が粗毛で被われないことで違いがある。

(原田幸雄・工藤伸一)

和名 チョレイマイタケ

環境省：該当なし

学名 *Dendropolyporus umbellatus* (Pers.:Fr.) Jülich

【形態的特徴】 子実体は複雑に枝分かれした柄と傘からなる。柄は根もとから幾回も枝を分枝し、それぞれの枝の先端に傘をつけ、全体は複雑なかたまりとなる。1株の大きさは高さ10～20cm、径10～30cm。傘はほぼ円形、中心はくぼんで浅いロート形、1つの傘の大きさは径1～4cm、厚さ2～5mm。表面は黄白～淡いきつね色、細かい鱗状のささくれがあり、あるいはほとんど平滑。肉は白く、歯切れのよい肉質、乾けばもろい。下面の管孔は深さ1～2mm、柄に垂生、孔口は円形、白色、2～4個/mm。柄は数多く枝分かれしてしだいに細く、白、基部にしばしば菌核を作る。菌核は凹凸の著しい不規則な形で、大きさ10×5cm程度、表面は黒い殻皮で包まれ、内部は白色。胞子は一端が尖った長卵形～長楕円形、無色、7～10×3～4μm、平滑。菌糸は2菌糸型。白色腐朽菌。

【選定理由】 発生環境が限定されており、発生が比較的稀なうえに、乱獲による絶滅が危惧される。

【分布と生態の概要】 ヨーロッパや北アメリカ、中国に分布する北方系の菌である（今関・本郷, 1989）。国内では北海道や本州中部以北などの冷温帯地域に発生し、やや稀である。本県では夏～秋、広葉樹枯木近くの地中の菌核または広葉樹の枯木から発生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 菌核は一旦採集されると子実体の発生は途絶えるため、菌核を形成するものでは、乱獲からの保護が望まれる。

【特記事項】 菌核を猪苓（チロイ）といい、漢方薬に用いられる。

（原田幸雄・工藤伸一）

和名 シロマイタケ

環境省：該当なし

学名 *Grifola albicans* Imaz.

【形態的特徴】 多数の枝分かれした柄の先にへら形の傘を生じ、大きな株を形成するきこである。心材を侵す根株腐朽菌で材の白腐れをおこす。子実体は多岐に分枝する柄と、枝の先端に形成される傘の集団からなり、1株の大きさは直径30cm程度、重さ3kg以上にも達する。傘は扇形～へら形～半円形など、幅2～5cm、厚さ2～4cm、表面は放射状の繊維紋とやや不鮮明な環紋をあらわし、ほとんど白色～クリーム色、古くなるとしだいに淡褐色を帯びてくる。肉は薄く、白色、質はややもろい。管孔は類白色、長さ1～3mm、柄に垂生。孔口は小形で円～不整円形、しばしば迷路状となる。柄は類白色～クリーム色。胞子は卵形～楕円形、無色、大きさは5～7×7μm、平滑。菌糸は2菌糸型。白色腐朽菌。

【選定理由】 過去に発生が確認されているものの、その後発生がほとんど確認されておらず希少種である。

【分布と生態の概要】 本州以北に分布するといわれているが、一般にはマイタケ *Grifola frondosa* (Dicks.:Fr.) S.F.Gray の白色タイプと混同されていることもあり、採集報告が少なく詳細は明らかでない。本県では初秋～秋、ミズナラなどの広葉樹の根際に発生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 発生場所が限定されるため、環境の変化によっては絶滅が危惧され、良好な環境の保存が望まれる。

【特記事項】 本種は日本特産といわれ、下北半島の旧川内町で採取された標本に基づき、新種記載された(今関, 1943)。

(原田幸雄・工藤伸一)

ヒダナシタケ目タバコウロコタケ科

B

和名 カバノアナタケ

環境省：該当なし

学名 *Fuscoporia obliqua* (Pers.:Fr.) Aoshi.

[形態的特徴] きのこは子実体と菌核からなる。菌核は10～30cmの巨塊となってカンバ類の立ち木樹幹の樹皮を破って発達する、表面は極めて堅く炭黒色で少し光沢があり、内部は黄褐色～茶褐色、かたいコルク質で充実して重い。子実体は菌核体の巨大さに反してきわめて地味で、寄主の樹皮下に薄く平たく広がってでき、傘を全くつくりず全背着生、表面は黄褐色～褐色、全面に管孔を密布する。管孔は長さ2～8mm、孔口はほぼ円形で小さく、3～5個/mm。胞子は広楕円形、無色～淡褐色、大きさ7～10×6～8μm、平滑。剛毛体は厚膜、褐色、35～80×5～13μm。

[選定理由] 発生環境が基質により限定されており、発生が比較的稀である。乱獲による絶滅が危惧される。

[分布と生態の概要] 国内では全国的に分布するが、発生は比較的稀である。本県では夏～秋、ダケカンバの立ち枯れ木や倒木上に発生する。

[生存に対する脅威と保存対策] 発生基質が限定されており、環境の変化によっては絶滅が危惧される。また、菌核が採取対象とされているので、乱獲からの保護が望まれる。

[特記事項] 本県では2005年に花田正巳によって青森市からはじめて採集された。菌核は漢方薬として利用される。

(原田幸雄・工藤伸一)

ズキンタケ目ズキンタケ科

B

和名 クロムラサキハナピラタケ

環境省：該当なし

学名 *Ionomidotis irregularis* (Schw.) Durand

[形態的特徴] 花びら状の黒い小形のきのこである。子実体は共通の短い柄と、それから発達する多数の花びら状あるいは不完全なロート状の子実盤からなる。子実盤は大きいもので幅約3～4cm、長さ約5～6cm、厚さ約1mm程度に達する。子実盤の子実層面はほぼ黒色、外側は細かい粒状で暗茶褐色。子実体の組織は薄いKOH水溶液中で紫色の色素を惨出する(ionomidotic反応)。胞子は両端がやや細まった長楕円形、無色、大きさ7.2～8.8×3.2～4μm、平滑。側糸は糸状、しばしば分枝し、先端は槍形で厚壁の細胞からなる。

[選定理由] 発生基質・環境が限定されて、発生も比較的稀である。

[分布と生態の概要] 本県のほか茨城県、鳥取県から報告がある。本県では秋、ブナの朽ちた倒木や枯れ幹上に発生する。(工藤ほか,1998)

[生存に対する脅威と保存対策] 発生基質および発生環境が限定されているため、発生は比較的稀である。今後の環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

[特記事項] 日本では鳥取県から採集された標本に基づきはじめて報告された(工藤ほか,1994)。本県では1997年、手塚豊によって初めて十和田市で採集された。

(原田幸雄・工藤伸一)

チャワнтаケ目クロチャワнтаケ科

B

和名 キツネノサカズキ

環境省：情報不足

学名 *Galiella japonica* (Yasuda) Otani

[形態的特徴] 洋梨形から椀形になるきのこ。子実体は幼時洋梨形で径 2mm 内外、のち上部は星状に裂けて子実層面を露出し、中央部は凹状にくぼむ。星状にさけた周縁は古いきのこでは外側に反り返っている。開いて裂開した椀の径は 2.5～4.5cm、深さ 2～5mm。柄は長さ 2cm、幅 1cm ほどで柱状、基部には黒色の菌糸束が付着する。子実層面は新鮮時褐色～肉桂色、乾燥するにつれ暗褐色から焦茶色となる。柄及び椀の外表面は黒色、弱いしわがある。肉は緻密で弾力がある。胞子は長楕円形、厚壁、無色、大きさは 25～38×11×14 μm、表面に小さいいぼ状突起をつける。側糸は糸状で、先端は多少膨らむ。

[選定理由] 過去に発生が確認されているものの、開発等により発生環境が破壊され、その後発生が極めて稀な種である。

[分布と生態の概要] 日本特産で、岩手県から 1918 年に発見された標本に基づき新種記載された。その後、見つかっていなかったが、60 年ぶりに鳥取県、新潟県から相次いで発見され（大谷, 1982）、本県のほかに石川県からも発生が確認された。本県では春、アカマツ林内の地上に発生する。

[生存に対する脅威と保存対策] 全国的に採集例は少なく発生環境も限定されている。開発による環境の変化によって絶滅が危惧されており、発生地の保存が望まれる。

[特記事項] 県内では青森市の手塚豊によって 1991 年に青森市内のアカマツ林内から初めて採取され（工藤ほか, 1998）、その後平内町からも発見された。上記青森市内の発生地では開発により既に絶滅した可能性がある。

（原田幸雄・工藤伸一）

チャワンタケ目アミガサタケ科

B

和名 トガリフカアミガサタケ

環境省：該当なし

学名 *Morchella patula* Pers.:Fr. var. *semilibera* (DC.:Fr.) Imai

【形態的特徴】 柄と網目上の隆起を具えた傘状の頭部をもつ中～やや大形、オリーブ褐色のきのこである。子実体は高さ4～10cm、ときに15cmに及ぶ。頭部は円錐形、頂端は尖り、下縁部は頭部の中央付近まで柄から離れる（帽子状型）。網目は縦脈の発達が良好なのに対し横脈は発達悪く縦長で、深さも比較的浅い。子実層はオリーブ黄～オリーブ褐色、脈の稜はしばしば濃色あるいは黒味をおびる。柄は円筒形、ほぼ同幅、基部はやや膨大してひだ溝があり、白色～黄土色で粉状である。子嚢胞子は楕円形、ほぼ無色、大きさは19～23×12～14μm、平滑。側糸は糸状、先端は球状に膨らむ。

【選定理由】 過去に発生が確認されているものの、その後発生が全く確認されていない。

【分布と生態の概要】 日本のほかに北アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアに分布する（今関・本郷, 1989）。国内では北海道と本州に分布するといわれているが、採集記録は極めて少ない。本県では春、青森市内の民家の庭の草地から採集された（工藤ほか, 1998）。

【生存に対する脅威と保存対策】 全国的にも発生記録が極めて少ない。発生環境も限定されているため、開発による環境の変化によって絶滅が危惧され、新たな発生地の確認が望まれる。

【特記事項】 本県では新山正俊によって青森市で初めて採集されたのが、唯一の記録である。

（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目ハラタケ科

C

和名 ツバハラタケ

環境省：該当なし

学名 *Pleurotus dryinus* (Pers.:Fr.) Kummer

[形態的特徴] ハラタケ型をした白い大形のきのこである。傘は初め縁が内側に巻く丸山形、のち開いて半円形となり、大きさは径 5～15cm、表面は灰色の微毛～淡褐色の鱗片に被われ、初め灰色がかった淡黄褐色、のち淡色となる。肉は白色、厚く緻密。ひだは柄に長く垂生し、やや疎、色は白色～やや淡黄褐色、のち縁が黄褐色となる。柄は傘と同色、初め中心性のち側生、太短く、長さ 1～2cm、幅 2～3cm。柄の基部およびその付近の材上にしばしば厚壁胞子が形成される。幼子実体は柄に薄い膜質のつばをもつが、成熟した子実体ではつばはしばしば消失する。胞子紋は白色。胞子は円柱形、無色、大きさ 10～15×4～5 μm、平滑、非アミロイド。

[選定理由] 発生基質および環境が限定されており、発生も比較的稀である。

[分布と生態の概要] 国内では本県のほかに北海道、奈良県、広島県での発生が知られている。本県では秋、ハリギリなどの広葉樹の立ち木に生じる（工藤ほか, 1998）。

[生存に対する脅威と保存対策] 全国的に発生は比較的稀である。発生基質及び発生環境が限定されているため、開発による環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

[特記事項] ハラタケ属 *Pleurotus* に所属するが、柄につばをもつ特徴がある。類似種にハラタケ *Pleurotus ostreatus* (Jacq.:Fr.) Kummer もあるが、こちらは柄につばがない。

（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目ヌメリガサ科

C

和名 ダイダイヌメリガサ

環境省：該当なし

学名 *Hygrophorus aureus* (Arrh.) Fr.

[形態的特徴] キシメジ型をした小形のきのこである。傘は径 3～5cm、初めまんじゅう形で低い中丘があるが、のちほとんど平らとなり、ついには中央がややくぼむ、表面は粘液に被われ、橙黄色～橙色、周辺は淡色、多少繊維紋を表す。肉は白～淡黄色。ひだは淡黄色で垂生し疎。柄は 4～7cm×0.7～1cm、上部には不完全なつばのなごりがあり、これより下は粘液で被われ淡黄色～淡橙黄色。胞子紋は白色。胞子は楕円形、無色、大きさ 7～9×4～5 μm、平滑。

[選定理由] 発生環境が林相によって限定されており、発生も比較的稀である。

[分布と生態の概要] 日本のほかにヨーロッパなどで発生が知られている。本県では晩秋～初冬、アカマツ林内に発生する。

[生存に対する脅威と保存対策] 現在、本県以外から正式な報告はない。開発による環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

[特記事項] 本県では青森市及び八戸市に発生することが知られている。国内で本県以外からの報告がみられないのは発生が稀なことのほかに、近縁種のシモフリヌメリガサ *Hygrophorus hypothejus* (Fr.:Fr.) Fr.と混同されている可能性もある。

（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目ヌメリガサ科

C

和名 ウスムラサキガサ

環境省：該当なし

学名 *Camarophyllus canescens* (A.H.Smith et Hesler) Sing.

[形態的特徴] キシメジ型をした小形のきのこである。傘は径3~5cm、初め丸山形で縁部は内側に巻き、のち平たい丸山形から平らに開く、表面平滑、ややフェルト状、非吸水性、湿時縁部において条線を表さない、色は淡灰色で多少青紫色を帯び、中央部でやや淡色、縁部ではしばしば同心円状に濃色、古くなると淡色となる。肉は薄く、灰色色。ひだは傘と同色、柄に直生状垂生~垂生、疎。柄は長さ4~7cm、幅7~10mm、下方に細くなり、しばしば多少ねじれ、縦筋状にくぼむ、表面は平滑、多少絹状光沢があり、淡灰色。胞子紋は白色。胞子は広卵形~類球形。無色、大きさ4.5~5.5(~6)×4~4.5μm、平滑。

[選定理由] 分布上学術的に貴重な種である。発生地及び発生環境が限定されているため、採集例が少ない。

[分布と生態の概要] 日本のほかにアメリカ及びヨーロッパ(イギリス、スウェーデン)に分布する。国内では、現在本県からのみ発生が知られている。本県では初秋、スギ林内のコケ類の生えた草地に発生する(工藤,2004)。

[生存に対する脅威と保存対策] 発生環境が限定されているので、環境の保存が望まれる。

[特記事項] 本県の発生確認地は青森市の1か所である。報告が少ないのは発生場所が限定されていることのほかに、近縁種のウバノカサモドキ *Camarophyllus lilacinogriseus* (Hongo) Hongo と混同されている可能性も考えられる。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目キシメジ科

C

和名 シロタモギタケ

環境省：該当なし

学名 *Hypsizigus ulmarius* (Bull.:Fr.) Redhead

【形態的特徴】 キシメジ型をした中～大形のきのこである。傘は径5～12cm、初め丸山形、のちほぼ平らに開き、やや中高、表面は黄褐色～灰褐色、周辺部に向かって淡色、ときに全体に灰白色、平滑で内生繊維状。乾いた条件下で発生すると傘表皮がしばしば粗くひび割れる。肉は白色で厚く、やや強靱、多少粉臭がある。ひだは類白色、柄に湾生～直生し、やや密。柄は長さ3～8cm、幅1～2cm、中心生または偏心生で曲がることが多く、上下同大か下方がやや太い。表面は傘とほぼ同色ないしほとんど白色、初め多少綿毛状、のち平滑。孢子紋は淡クリーム色。孢子は類球形～広楕円形、やや厚膜、無色、大きさ5～6.5×4～5μm、平滑、非アミロイド。

【選定理由】 発生基質及び環境が限定されており、発生も比較的稀である。

【分布と生態の概要】 日本以外ではヨーロッパ及び北アメリカに分布する（長沢ほか,1988）。国内では本県以外に北海道と鳥取県から報告がある。本県では秋、ハルニレの枯れ木または立ち木に発生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 発生基質及び発生環境が限定されている。開発による環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

【特記事項】 日本では従来、ブナシメジ *Hypsizigus marmoreus* (Peck) Bigelow と混同されてきたが、長沢・有田（1988）によって両者の違いが明示された。

（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目キシメジ科

C

和名 ツノシメジ

環境省：該当なし

学名 *Leucopholiota decorosa* (Peck) O.K.Miller, Volk et Bessette

- [形態的特徴]** キシメジ型をした中形のきのこである。傘は径4～7cm、初め半球形、のち丸山形から開いて多少中高の平たい丸山形、表面は中央角状、周辺に向って剛毛状の大型の鱗片に密に覆われ、茶褐色。ひだは柄に直生～多少湾生状直生、白色、やや密。柄は長さ4～6cm、幅0.8～1.2cm、下方に太くなり、上部に膜質鱗片状、褐色のつばをつけ、つばの上部は白色、つばより下方は傘の周辺と同様の鱗片に密に被われる。孢子紋は白色。孢子は楕円形～ややソラマメ形、無色、大きさ5～6×3.5～4μm、平滑、アミロイド。
- [選定理由]** 分布上学的に貴重な種で、発生環境の基質が限定されており、発生も稀なため、採集例が少ない。
- [分布と生態の概要]** 北方系の種で、日本のほかに北アメリカなどに分布する。国内では本県のほかに、中部地方の山間部で発生が知られている。本県では秋、ブナの倒木上に発生する。発生は比較的稀である。
- [生存に対する脅威と保存対策]** 発生基質および発生環境が限定されているため、開発による環境の変化によって絶滅が危惧されるので、環境の保存が望まれる
- [特記事項]** 国内では1989年に長内哲男らによって十和田市蕨から初めて採集された。近年、各地で発見されているが比較的稀である。1996年(Miller et al.) *Leucopholiota* (ツノシメジ) 属の新組み合わせとして発表された。

(原田幸雄・工藤伸一)

オドタケ目キシメジ科

C

和名 オドタケ

環境省：該当なし

学名 *Clitocybula esculenta* Nagasawa et Redhead

【形態的特徴】 モリノカレバタケ型をした中～大形のきのこである。傘は径5～10cm、つり鐘形からやや中高な丸山形に開き、初め粘土色のち茶白色～象牙色となるが古くなると黒っぽくなる、表面は中央部に褐色の細点を密布するか、またはほぼ平滑で、粘性はない。ひだは柄に離生または陥入し密で、ややくすんだ黄白色～茶白色。柄は長さ15～30cm、幅6～12mmで、同幅または下部に向かってやや太くなり、初めほぼ灰白色のち暗色となり、表面に縦すじ模様がある。胞子は広楕円形、大きさ4～6×3～4μm、平滑、アミロイド。

【選定理由】 発生基質環境が限定されており、発生も比較的稀である。

【分布と生態の概要】 本県以外では栃木県、群馬県で発生が確認されている。本県では秋、ブナ、ミズナラ、ハルニレ、トチノキなどの広葉樹の腐朽材上に多数束生する（工藤ほか,1998）

【生存に対する脅威と保存対策】 全国的に発生は稀である。開発による発生環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

【特記事項】 本種は、近年本県産標本に基づき新種報告されたきのこである（Nagasawa and Redhead,1988）

（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目キシメジ科

C

和名 ホシアンズタケ

環境省：該当なし

学名 *Rhodotus palmatus* (Bull. :Fr.) R. Maire

【形態的特徴】 キシメジ型をした小～中形のきのこである。全体が淡紅色～肉色を帯び、傘は径3～8cm、初めまんじゅう形、のち丸山形からほぼ平らに開く、表面は初め網目状のしわをあらわすが、のちやや不明瞭となり、周囲に条線をあらわし、湿っているとき粘性がある。傘の表皮は厚く強靱でゴム状、剥がれやすく、肉はやや厚く、淡紅色、やや強靱。ひだは淡紅色、やや疎、湾生～直生。柄は長さ2～6cm、幅6～15mm、初め白色、のち傘と同色、上部にしばしば褐色の分泌物を付着する。胞子は類球形、大きさ6～8μm、表面はトゲに被われ粗面。

【選定理由】 発生環境が基質等によって限定されており、発生も比較的稀である。

【分布と生態の概要】 長く北海道からしか知られていなかったが、近年、本県のほか栃木県、長野県でも見つかっている。本県では春および秋、ハルニレの腐朽木に発生し（工藤ほか,1998）五所川原市と十和田市で採集された。

【生存に対する脅威と保存対策】 全国的に発生は稀である。発生基質および発生環境が限定されているため環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

【特記事項】 1属1種のきのこで、分布上学的に貴重な種である。近年になって2、3の県で見出されたが、まだ全国的に発生地は少ない。

（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目オウギタケ科

C

和名 フサクギタケ

環境省：該当なし

学名 *Chroogomphus tomentosus* (Murr.) O. K. Miller

【形態的特徴】 カヤタケ型をした小～中形のきのこである。傘は径3～6cm、初め丸山形からのち平らに開き、ときに中央でややくぼむ、表面は圧着した鱗片または綿毛状の軟毛におおわれ、鈍い橙色または黄土色、ほとんど粘性が無い。肉は鈍い橙色。ひだは柄に垂生、疎、初め傘と同色のち黒褐色。柄は長さ4～7cm、幅1～1.5cm、上方に向かってやや細まるかまたは基部付近でやや急に細まり、中実または中空、表面は綿毛状～ほぼ無毛で、ほぼ傘と同色。柄の上部には繊維状の被膜の名残が付着するが、消失しやすい。胞子紋は黒色。胞子は長楕円形～類紡錘形、大きさ15～25×6～8μm。縁および側シスチジアは長円柱状で、厚壁。傘の表皮の菌糸はメルツァー液で紫色に染まる。

【選定理由】 分布上学的に貴重な種で、発生環境が林相によって限定されている。発生が稀なため採集例が少なく、今後の詳細な調査が必要である。

【分布と生態の概要】 マツ属、モミ属、ツガ属などの針葉樹林に発生する(今関・本郷, 1987)。全国的に分布するが、発生はやや稀である。本県では秋、アオモリトドマツの樹下に発生し、青森市から採集されている。

【生存に対する脅威と保存対策】 発生環境が限定されているため開発による環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

【特記事項】 類似種のクギタケ *Chroogomphus rutilus* (Schaeff.:Fr.) O.K.Miller は傘の表皮が初め絹状で、のち平滑になる点で違いがある。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目イグチ科

C

和名 ヒメヌメリイグチ

環境省：該当なし

学名 *Suillus viscidipes* Hongo

【形態的特徴】 粘性をもった小形な茶褐色のきのこである。傘は径 1.5～3cm、初め半球形、のちまんじゅう形からほぼ平ら、表面は粘性があり、につけい色～茶褐色で周辺淡色、全体に多数のしわがあり凹凸状。傘の下面は幼時白色で粘性のある被膜に被われ、被膜はのちに柄に早落性のつばを形成する。肉は淡黄土色で傘表皮下は淡赤褐色、傷つけても変色しない、無味無臭。管孔は上生～湾生、初め淡黄色のち暗オリーブ色。孔口も同色。柄は長さ 4～7cm、幅 3～5mm、上下同大で基部尖り、表面は淡肉色～淡黄色、基部と頂部で白色、つばより下は粘性で褐色の条線がある。胞子は類紡錘形、帯褐黄色、大きさ 10～15.5×4～5μm、平滑。

【選定理由】 分布上学的に貴重な種で、発生環境が林相によって限定されており、発生が稀なため採集例も少ない。

【分布と生態の概要】 日本特産。道南と本県から滋賀県までの本州に広く分布しているようだが発生は比較的稀である。本県では夏～初秋、ミズナラ雑木林内地上に発生し、青森市で採集された（工藤ほか, 1998）。

【生存に対する脅威と保存対策】 ミズナラ雑木林の伐採や放置によって発生環境が悪化している。良好な里山二次林の保存が望まれる。

【特記事項】 近年、北海道からも採集された。

（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目イグチ科

C

和名 アイゾメイグチ

環境省：該当なし

学名 *Gyroporus cyanescens* (Bull. :Fr.) Quél.

【形態的特徴】 全体に強い青変性のある小形のきのこである。傘は径2.5～5 cm、初めまんじゅう形からのち開いて平たい丸山形、表面はフェルト状～繊維状、淡黄～帯黄褐色。管孔は白のち黄色、柄に離生。柄は長さ4～7cm、幅1～2 cm、頂部でやや急に細まり倒こん棒形あるいは中央部付近～下部でややふくらんだ円柱形、表面は頂部白色、下部は傘と同色、内部は横に亀裂を生じしだいに中空となる。幼時柄頂部に不明瞭な繊維状のつばをもつが、つばはのち消失する。子実体は手で触れたり切断するとすぐに濃紺色に変色する。胞子紋は淡黄色。胞子は楕円形～広楕円形、ときにややソラマメ形、大きさ7～10×4～5.5 μm。

【選定理由】 分布上学的に貴重な種である。発生場所が限定され発生が稀なため、採集例も少ない。

【分布と生態の概要】 西日本で知られていたきのこであるが、近年、本県のほかに北海道からも報告された。本県では初秋、ブナ・マツなどの混じった雑木林内地上に発生し、青森市から採集されている。

【生存に対する脅威と保存対策】 発生環境が限定され全国的に発生は稀である。開発による環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

【特記事項】 本県でのこれまでの発生確認地は、伊藤進によって採集された青森市の1か所だけである。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目イグチ科

C

和名 アミハナイグチ

環境省：該当なし

学名 *Boletinus cavipes* (Opat.) Kalchbr.

【形態的特徴】 全体に褐色をした中形のきのこである。傘は径3~8cm、初めやや円錐状、のちまんじゅう形からほぼ平に開く、表面は黄褐色~褐色あるいは赤褐色で、軟らかい繊維状の細鱗片でおおわれ、粘性はない。肉は淡黄色、変色性はない。管孔は柄に垂生し、黄色のち帯オリーブ黄~汚黄土色。孔口は放射状に配列し、大小不同でときに大きさ4×3mmに達する。柄は長さ3~8cm、幅0.5~1.0cm、中空、頂部に白色膜質のつばがあり、つばより上方は黄色で、管孔の延長による粗い網目模様があり、下方ではほぼ傘と同色で細鱗片状。胞子紋は黄オリーブ色。胞子は楕円形~類紡錘形、大きさ6~10×3~4μm。

【選定理由】 発生環境が林相によって限定されており、発生場所も限られている。

【分布と生態の概要】 発生はカラマツ林に限定されるが、全国的に広く分布する。本県では初秋、カラマツ林内の地上に発生し、青森市から採集されている。

【生存に対する脅威と保存対策】 発生環境がカラマツ林に限定されているため、環境の変化によって絶滅が危惧される。

【特記事項】 本県でのこれまでの発生確認地は、伊藤進によって採集された青森市の1か所だけである。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目イグチ科

C

和名 ムラサキヤマドリタケ

環境省：該当なし

学名 *Boletus violaceofuscus* Chiu

【形態的特徴】 全体に紫色の中形~大形のきのこである。傘は径5~10cm、平滑、ほぼ無毛で、湿ると多少粘性を帯び、暗紫色、成熟したものではしばしば黄色、オリーブ色、褐色などの斑紋を生じる。肉は白色で変色しない。管孔は初めほぼ白色、のち淡黄色から汚黄褐色となる。孔口は小形で円形、初め白色の菌糸でふさがれる。柄は長さ7~9cm、幅1~1.5cm、下方に太くなり、中実、表面は暗紫色、全面網目模様で被われる。胞子紋はオリーブ褐色。胞子は類紡錘形、大きさ14~18×5.5~6.5μm、平滑。

【選定理由】 ミズナラ雑木林の伐採など環境の悪化により、近年発生減少の傾向が見られる。

【分布と生態の概要】 日本のほかに中国、韓国に分布する。日本では全国的に広く発生するが、北日本では発生は比較的稀である。本県では秋、アカマツが混じったミズナラ雑木林のほか八甲田のブナ林に発生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 本県においては発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。

【特記事項】 八甲田のブナ林では、全体に紫色の薄いタイプのものが発生する。本県では典型的なものの発生は比較的稀である。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目オニイグチ科

C

和名 アシナガイグチ

環境省：該当なし

学名 *Boletellus elatus* Nagasawa

【形態的特徴】 細長い柄をもった中形のきのこである。傘は径3～8cm、初め半球形～まんじゅう形、のち開いて平たい丸山形、表面はややフェルト状、湿ったときやや粘性あり、赤褐～くり褐色または帯紫褐色、肉は淡黄色、切断するとわずかに赤変することもある。管孔は柄の周囲で陥没し上生～ほぼ離生、初め明黄色、のち緑黄～オリーブ緑色。孔口は管孔と同色、中～大形、変色性はない。柄は長さ10～20cm、幅6～12mm、下方に太くなり、しばしば基部付近で一方に屈曲している、表面は軟毛で被われ傘と同色かまたはより暗色、ときに頂部で不明瞭な網目状の模様をあらわす。胞子は楕円形～円筒状楕円形、大きさ16～19×9～11μm、表面には縦に走る溝状のすじがある。

【選定理由】 分布上学的に貴重な種であるが、発生が稀なため採集例が少ない。

【分布と生態の概要】 日本特産。西日本に多く見られ、暖温帯系のきのこと思われる。本県では初秋、ブナ林に稀に発生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 本県においては発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。

【特記事項】 本県では手塚豊によって八甲田から初めて採集されている(工藤ほか, 1998)が、その後の採集記録がない。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目ベニタケ科

C

和名 アカハツモドキ

環境省：該当なし

学名 *Lactarius deterrimus* Gröger

【形態的特徴】 カヤタケ型をしたきのこである。傘は径6～10cm、初め中央がくぼんだまんじゅう形から平らに開き、浅いじょうご形となる、表面は湿っているときやや粘性があり、くすんだ淡橙黄色、しだいに全体に淡青緑色を帯び、中央濃色となる、環紋は不明瞭、縁部は初め内側に巻く。肉は脆く白色、傘の下部や柄の周辺およびひだの上は橙黄色を帯び、傘の下部は青緑色を帯びる。乳液は橙色、空気に触れるとしだいに青緑色となる。ひだはやや垂生し、橙黄色、傷ついた部分は青緑色となり、幅やや狭く、やや密。柄は長さ3～5cm、幅1～1.5cm、傘とほぼ同色、中空。胞子は広楕円形、大きさ8.5～11.5×7～9μm、表面は網目で被われる。

【選定理由】 発生環境が林相によって限定され、発生も比較的稀である。

【分布と生態の概要】 本県以外では岩手県に分布することが知られているが、全国的な分布は不明である。本県では初秋、エゾマツおよびドイツウヒ樹下に発生し、青森市田代平から採集されている。

【生存に対する脅威と保存対策】 本県における発生は比較的稀である。発生環境が限定されているため、開発による環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

【特記事項】 日本では本種は1991年に岩手県から初めて報告された。トウヒ属と菌根関係にあると思われ、岩手県ではドイツウヒの樹下に発生する。類似種のアカハツ *Lactarius akahatsu* Tanaka は初め傘が青緑色を帯びていない点および柄に浅いくぼみがある点で違いがある。

(原田幸雄・工藤伸一)

ヒダナシタケ目シワタケ科

C

和名 ニカワウロコタケ

環境省：該当なし

学名 *Gloeostereum incarnatum* S. Ito et Imai

【形態的特徴】 半円形～貝殻形をした膠質のきのこ、生のときは軟らかく、乾けば収縮して軟骨状に堅くなる。傘は初め球状、発育して貝殻状～やや扇形、幅 2～10cm、水をふくむと厚さ 5mm 余りになる。傘の表面は初め白～淡い鮭肉色、短い毛で被われるが後には暗褐色になる、下面の子実層はクリーム色～鮭肉色、細かいしわを帯び、やや粉面。肉は半透明、淡褐色。胞子は卵形～楕円形、無色、大きさ 6～8×3～4 μm、平滑。

【選定理由】 発生基質・環境が限定されており、発生も比較的稀である。

【分布と生態の概要】 北海道だけに知られていたきのこであるが、近年、日本の亜高山地帯にも発生することが分かった（今関・本郷, 1989）。本県では秋、ハルニレの枯れ木上に発生する（工藤ほか, 1998）。

【生存に対する脅威と保存対策】 全国的に発生は比較的稀である。発生基質および発生環境が限定されているため環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

【特記事項】 本県では、手塚豊によって十和田市でハルニレから初めて採集された。

（原田幸雄・工藤伸一）

ヒダナシタケ目サルノコシカケ科

C

和名 タマチョレイタケ

環境省：絶滅危惧 類

学名 *Polyporus tuberaster* Pers.:Fr.

【形態的特徴】 浅いロート形をした通常小～中形、ときに極めて大形になるきのこである。傘はほぼ円形、扁平、中央部でくぼんで浅いロート状になり、径 4～12（～25）cm、厚さ 0.5～1（2）cm、周辺で薄くなる、表面は黄茶色で、平たく密着した色の濃い鱗皮を生じ、しばしば多少ささくれる、肉は厚さ 3～8mm、白くしなやかな肉質。管孔は長さ 1～3mm、白色。子実層面は柄に垂生する。柄はほぼ中心生、中実で肉は締まり、長さ 5～8cm、太さ 0.5～1cm、表面は類白色～淡黄白色、地面から発生するものでは地中に黒色の塊状の偽菌核を形成する。胞子は長楕円形、無色、大きさ 10～15×4～4.5 μm、平滑。

【選定理由】 学術的に貴重な種で、国の絶滅危惧種（CR+EN）に指定され（環境庁, 2000）ている。本県においても発生が確認されているが、発生は少ない。県内の情報が不足である。

【分布と生態の概要】 日本のほかに北アメリカおよびヨーロッパに分布し、地中の偽菌核からまたは広葉樹の材から発生する（今関・本郷, 1989）。本県では春、ときに初秋～秋、ミズナラやブナの倒木や枯れ木上または地中の偽菌核から発生する（工藤ほか, 1998）。白色腐朽菌。

【生存に対する脅威と保存対策】 本県においては発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。

【特記事項】 子実体が材上に発生した場合は、アミヒラタケ *Polyporus squamosus* Fr. としばしば混同されているが、後者は傘の鱗片が圧着し、肉質も堅く強靱、柄の根元が黒褐色である点で違いがある。

（原田幸雄・工藤伸一）

ヒダナシタケ目サルノコシカケ科

C

和名 ツヤナシマンネンタケ

環境省：絶滅危惧 類

学名 *Pyrrhoderma sendaiense* (Yasuda) Imaz.

[形態的特徴] マンネンタケ型をした小～中形のきのこである。傘は腎臓形、扁平あるいは貝殻状に湾曲、長3～10cm、厚さ3～10mm、表面はにぶい光沢を帯び、放射状に走るしわ状の凹凸と浅い環溝をそなえ、新鮮なとき黒褐色であるが乾けば黄褐色となる。肉は厚さ2～5mm、乾けば堅く弾力性を失い、黄褐色。子実層面は管孔状、灰褐色。孔口は微細。柄は傘の片側または中心をずれてつき、直立性、長さ5～10cm、幅5～15mm、表面は厚く堅い殻皮で被われる。胞子は類球形、無色、大きさ5～6.5×5μm、平滑。

[選定理由] 国の絶滅危惧種(CR+EN)(環境庁,2000)である。本県においても少数例発生が確認されているが、発生は比較的稀である。

[分布と生態の概要] 日本特産のきのこで、本県のほかに岩手県、宮城県、新潟県、神奈川県、鳥取県、大分県から報告がある(環境庁,2000)。本県では秋、ブナの枯れ木、切り株に発生する

[生存に対する脅威と保存対策] 本県では発生環境および発生基質が限定され、環境の変化によって絶滅が危惧される。

[特記事項] マンネンタケの名前が付くがマンネンタケ *Ganoderma lucidum* (Leyss.: Fr.) Karst. とは別の属に分類され、マンネンタケのように表面にラッカー様の光沢をもたず、胞子もマンネンタケ型でない。

(原田幸雄・工藤伸一)

ヒダナシタケ目サルノコシカケ科

C

和名 カンバタケ

環境省：該当なし

学名 *Piptoporus betulinus* (Bull.: Fr.) Karst.

【形態的特徴】 子実体はふつう腎臓形～平たいまんじゅう形、くぼんだ位置に太くて短い柄をつけるが、ときに傘は半円形、柄は痕跡的である。傘は大きさ幅 10～25cm、厚さ 2～5cm、表面は薄い表皮をこうむって無毛平滑、なめし皮状の触感があり、くすんだ淡いたばこ色、環紋も環溝もないが、表皮はしだいに裂けて剥がれ落ち、白い肉をあらわす、縁は鈍縁でやや下に湾曲する。肉は厚く、白、緻密できめ細かいコルク～なめし皮の触感を呈し、酸味がある。下面は白～黄白色、周辺部は下に巻きこんだ傘の周縁部で縁どられている。胞子はソーセージ形、無色、大きさ $4\sim5\times 1.5\sim 2\mu\text{m}$ 、平滑。

【選定理由】 発生環境が基質等によって限定されており、発生も比較的稀である。

【分布と生態の概要】 全国的に分布し、亜高山のカバノキ林で発生が見られる(今関・本郷, 1989)。本県では夏～秋、ダケカンバの枯れ木または生木上に発生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 発生基質・環境が限定されているため今後の環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

【特記事項】 本県では永く見つかっていなかったが、2004年 花田正巳によって青森市から初めて採集された。

(原田幸雄・工藤伸一)

ヒダナシタケ目ニンギョウタケモドキ科

C

和名 ニンギョウタケ

環境省：該当なし

学名 *Albatrellus confluens* (Alb.et Schw.: Fr.) Kotl.et Pouz.

【形態的特徴】 扇形をした肉質の大形のきのこである。傘は柄があり、ふつう根もとから数本かたまって生長し、径 30cm 以上に達する大きな集団をつくる。1つの傘は扇形～へら型、互いに押し合い、癒着して形はいちじるしく変形し、大きさ幅 1.5～5cm、厚さ 1～3cm、表面は無毛平滑、黄白～肌色、縁のほうは薄く、しばしば波打つ。肉は白～クリーム色。管孔面は白～クリーム色、管孔は長さ 1～5mm、柄に長く垂生、孔口は 2～4個/mm、円形のち多角形。柄は太く、長さ 3～10cm、幅 1～3cm、側生または偏心生。胞子は広楕円形～球形、無色、 $4\sim 5\times 3\sim 4\mu\text{m}$ 、平滑。

【選定理由】 発生環境が林相によって限定されており、発生も比較的稀である。

【分布と生態の概要】 全国的に分布し、マツ・モミ・トウヒなどの針葉樹に発生する。本県では秋、アカマツ林内の地上に発生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 発生環境が限定されているため今後の環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

【特記事項】 本県では永く見つかっていなかったが、2005年 山口明好氏によって大鰐町から初めて採集された。

(原田幸雄・工藤伸一)

ヒメノガステル目ショウロ科

C

和名 ホンショウロ

環境省：該当なし

学名 *Rhizopogon luteolus* Fr.et Nordh.

[形態的特徴] 地中生または半地中生のきのこである。子実体は球形～塊形、径1.5～3cm、初め白色のち帯黄色、地表に出ると黄褐色、傷をつけても赤く変色はしない、表面には淡黄色の根状菌糸束をまとい、表皮は薄い。グレバは初め麦色のち褐色となり、初めから不快臭がある。腔室は球形、長形または迷路状、内壁に担子器を形成し、担子器は4～6孢子性。胞子は長楕円形～紡錘形、褐色、大きさ7.5～12.5×3.5～5μm、平滑。

[選定理由] 発生環境が林相によって限定されており、発生も稀である。

[分布と生態の概要] 全国的に広く分布するが、発生は比較的稀である。本県では春および秋、クロマツ樹下の地上に発生する。

[生存に対する脅威と保存対策] 発生環境が限定されているため環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

[特記事項] クロマツ林に発生する菌根性のきのこで、本県で発生が確認されている地域は今のところ青森市だけである。類似種のショウロ *Rhizopogon rubescens* Tul.は子実体の表皮が赤く変色し、グレバが初め白色である点で違いがある。

(原田幸雄・工藤伸一)

キクラゲ目ヒメキクラゲ科

C

和名 ムカシオオミダレタケ

環境省：絶滅危惧 類

学名 *Protodaedalea hispida* Imazeki

[形態的特徴] ヒラタケ型をした中～大形のきのこである。子実体は平たい丸山形～やや馬蹄形、無柄で、基物に直接附着し半円形を呈する。傘は径3～15cm、基部で厚さ1～7cm、湿性、軟骨質で、ややもろい、乳白～淡黄褐～淡褐色、乾燥すると、著しく収縮して暗褐色となる。傘上面は長さ1～5mmの羽毛状に分枝した毛におおわれ、下面に子実層托が発達し、放射状～迷路状のひだとなる。ひだは厚く、傘と同色。胞子は卵形、無色、大きさ10～12×4～7μm、平滑。

[選定理由] 国の絶滅危惧種(CR+EN)(環境庁,2000)で、本県ではブナ林に比較的普通に見られるが、近年発生は減少傾向にある。

[分布と生態の概要] ブナやイタヤカエデに発生し、広く分布するが発生は稀とされている(今関・本郷,1989)。本県では夏～秋、ブナの立ち木や腐朽材上に発生する。

[生存に対する脅威と保存対策] 本県においては発生地が限定されており、発生が減少してきていることから、環境の変化によっては絶滅が危惧される。

[特記事項] 日本特産種で、傘の裏がひだ状で特異な形をしているため、外見からはキクラゲ類の仲間とは思えない。

(原田幸雄・工藤伸一)

ズキンタケ目キンカクキン科

C

和名 ツバキキンカクチャワシタケ

環境省：該当なし

学名 *Ciborinia camelliae* Kohn

【形態的特徴】 小形の子嚢盤からなるきのこである。子嚢盤は径3～18mm、浅い椀形で、飴色～茶褐色、外面はわずかに粉状。柄は円筒形、細長く、長さは時に10cmに及び下方に向って細くなり、幅1～2mm、椀とほぼ同色、基部には黒褐色の菌核がある。子嚢は円筒形～こん棒状円筒形、頂孔はヨード反応陽性、8個の孢子を生じる。子嚢孢子は楕円形～卵形、ときに1端あるいは両端とがり1室、無色、大きさ8-12×4-5μm。側糸は糸状、径1～1.5μm、先端は膨大して径3μmにおよぶ。

【選定理由】 発生地域がツバキ樹林に限定されており、今後開発等による環境の悪化により絶滅が危惧される。

【分布と生態の概要】 北海道を除く全国に分布する。本県では早春、ヤブツバキの樹下に発生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 発生基質・環境が限定されているため環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

【特記事項】 地上に落ちたツバキの花弁に菌が感染し、やがて花弁・萼片を菌核化して越冬、翌年の春、菌核から有柄の子嚢盤を生じる。

(原田幸雄・工藤伸一)

ズキンタケ目ズキンタケ科

C

和名 クチキトサカタケ

環境省：絶滅危惧 類

学名 *Ascoclavulina sakaii* Y.Otani

【形態的特徴】 とさか形をした中形のきのこである。子実体は塊状の基部から多くのこん棒状あるいは扁平状の突起を生じ、突出部の全表面に子実層を生じる。全体の大きさは5～9×4～7cm、高さ3～5cm。こん棒状のものは突出部は径1cm以内で長さ2～3cm、扁平状のものは上部が広がって幅約2cm、下方は細まり厚さ0.5cm、長さ通常2cm内外、いずれも表面は平滑もしくは微細な縦じわを生じ、灰黄緑～帯緑灰色、のちに淡オリーブ褐色～オリーブ褐色となる。孢子は楕円形、大きさ6～7×2.5～4μm、平滑。側糸は糸状。

【選定理由】 国の絶滅危惧種(CR+EN)(環境庁,2000)である。本県では比較的普通に見られるが発生量は多くない。

【分布と生態の概要】 本州のブナ帯に広く分布する。本県では夏～秋、ブナの倒木上に発生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 発生基質および発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。

【特記事項】 1属1種の日本特産種である。

(原田幸雄・工藤伸一)

チャワソタケ目ベニチャワソタケ科

C

和名 オオミノミミブサタケ

環境省：該当なし

学名 *Wynnea americana* Thaxter

〔形態的特徴〕 耳状をした中形のきのこで、地中の菌核から生じる。菌核は塊茎状、数個の塊に分かれ、表面にはいちじるしい凹凸としわ襞があり、全体の大きさ径5~6cm、黒褐色。子実体は高さ2~3cm、径1cm程の柄を持ち、上部に2~6個の耳房状の子囊盤をつくり、全体の高さ6~15cm。個々の子囊盤は幅2~3cm、子実層面(内側)は初め暗赤紫~褐色、のち帯紫黒色、外側は顆粒状でざらざらしており黒褐色、乾くと縦じわを生じる。子囊は円筒形、厚膜、8個の子囊胞子を生じる。子囊胞子は扁豆形、両端に小さな乳頭突起があり大きさ32~47×15~19μm、表面には数本の縦線模様が有る。側糸は糸状、径2.5~3.5μm、隔膜を有し、上部は膨大しない。

〔選定理由〕 発生地域が限定されている。本県では発生が比較的稀で、採集報告が少ない。

〔分布と生態の概要〕 日本のほか北アメリカに分布し、北方系の菌と思われる。菌核にはクロゲナラタケ菌の菌糸との共生が認められるという(Fukuda et al., 2003)。国内では北海道から本州に分布するが比較的稀である。本県では秋、広葉樹林内の地上に発生し、十和田市から採集されている。

〔生存に対する脅威と保存対策〕 発生地の環境の保存と今後の分布調査が望まれる。

〔特記事項〕 類似種のみミブサタケ *Wynnea gigantea* Berk. et Curt. は子実層面が初め黄褐色であること、子囊胞子が小形であることで違いがある。

(原田幸雄・工藤伸一)

チャワソタケ目アミガサタケ科

C

和名 オオズキンカブリ

環境省：該当なし

学名 *Ptychoverpa bohemica* (Krombh.) Boud.

〔形態的特徴〕 有柄で頭部が著しいしわ状の深編笠形をした特異なきのこである。子実体は高さ8~15cm、柄の上部に帽状の頭部をもち、頭部の縁は柄に離生する。頭部表面のひだは顕著だが連絡脈は少なく、黄~褐色。柄は幅2cm、円筒形、白色、表面は綿くず様の鱗被におおわれる。子囊は通常2、まれに4胞子性。子囊胞子は長楕円形あるいはボート形、無色または帯黄色、大きさ54~80×12.5~18μm、平滑。側糸は糸状、分岐し、先端はやや膨らみこん棒状。

〔選定理由〕 発生環境が限定されているため発生場所が限られており、発生も比較的稀である。

〔分布と生態の概要〕 本種は北海道からしか報告がなかったが、近年、本県から採集され、栃木県などからも採集されている。本県では早春、ブナ・ミズナラ等の雑木林内の地上に発生する。

〔生存に対する脅威と保存対策〕 発生環境が限定され、発生も稀なため環境の保存が望まれる。

〔特記事項〕 本種が所属する属は子囊胞子が通常2~4個しか形成されない特異なグループである。本県では初めて新山正俊によって青森市から採集されている(工藤ほか, 1998)。

(原田幸雄・工藤伸一)

チャワソク目ベニチャワソク科

C

和名 シロキツネノサカズキ

環境省：該当なし

学名 *Microstoma floccosum* (Schw.) Raitviir

〔形態的特徴〕 チャワソク型をした小形のきのこである。子実体はワイングラス形で長い柄をもつ。椀は径3～10mm、初め球形、のち頂部が開き深さが0.5～1cmの洋盃形～漏斗形、縁は平滑、内面の子実層は鮮やかな赤色、外面は白く長い毛におおわれるため白っぽくみえる。毛は厚膜で先端がとがる剛毛様。柄は長さ1～4cm、幅2mm程度、類白色、椀の外側と同じ白い毛におおわれる。子嚢胞子は長楕円形、無色、大きさ23～35×11～14μm、平滑。側糸は上部で網目状に連絡し、先端はやや膨らむ。

〔選定理由〕 発生環境が限定され、環境の変化によって絶滅が危惧される。全国的に分布するが本県における発生は極めて稀である。

〔分布と生態の概要〕 本県では初夏、湿り気のある林内の落ち葉に半ば埋もれた落枝上に発生する。

〔生存に対する脅威と保存対策〕 小形で乾燥に弱く、本県においては発生地が限定されているため、環境の保存が望まれる。

〔特記事項〕 本県における採集記録は十和田市における2例だけである（工藤ほか,1998）。類似種のシロキツネノサカズキモドキ *Microstoma macrosporum* (Otani) Y.Hrada et S. Kudo は早春に発生し、椀の縁が星形に浅く裂ける点、また、子嚢胞子が著しく大形である点で違いがある。
（原田幸雄・工藤伸一）

ニクザキン目ニクザキン科

C

和名 カエソク

環境省：該当なし

学名 *Podostroma cornu-damae* (Pat.) Boedijn

〔形態的特徴〕 棒状または上部がとさか状～手の指状に分岐した特異なきのこである。子実体は全体高さ15cm程度に達し、幅1～2cmの円柱形または扁平な円柱状、またはしばしば上部が枝分かれてとさか状～手の指状となる。分岐の先端は丸いかまたはとがり、表面は赤橙色、内部は白色、堅い肉質。上部の表層に子嚢殻が埋生する。

〔選定理由〕 発生環境が林相によって限定されているため発生場所が限られ、発生も比較的稀である。

〔分布と生態の概要〕 全国的に分布するが、発生は比較的稀である。本県では夏～初秋、ブナ・ミズナラなどの広葉樹林内地上に発生する。

〔生存に対する脅威と保存対策〕 発生環境が限定されているため環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

〔特記事項〕 本県では新山正俊が1992年に旧上北町で採集しているが、その後同地区での採集記録がない。岩木山麓でも見ついているというが、詳細は不明である（工藤ほか,1998）。有毒。
（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目ヌメリガサ科

D

和名 ナナイロヌメリタケ

環境省：該当なし

学名 *Hygrocybe laeta* (Pers.:Fr.) Kummer

【形態的特徴】 傘と柄が粘液におおわれた小形のきのこである。傘は径 2~3 cm、初め丸山形、のち開いて中央が多少窪んだ平たい丸山形、表面は著しい粘液におおわれ、平滑、色はくすんだ橙黄色、肌色またはピンク色にオリーブ、黄、灰紫色などをまじえ、湿っているとき放射状の条線をあらわす。ひだは直生~垂生、疎、ピンク色~肌色でしばしば淡紫~淡青色をまじえ縁部ゼラチン状を呈する。柄は長さ 4~10cm、幅 2~4mm、表面は著しい粘液におおわれ、上部はピンク色、淡紫または淡青色、下部はしばしば帯黄色、中空。胞子は楕円形、無色、大きさ 6.5~8×4~4.5 μm、平滑。ひだの縁部には無色毛状の縁シスチジアが多数存在する。

【選定理由】 発生地域が限定されており、発生も比較的稀である。また、情報も少ない

【分布と生態の概要】 全国的に分布するが本県では発生が稀である。本県ではスギ林内のコケ類が繁殖している草地に発生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 本県においては発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。また分布等の詳細な調査が必要である。

【特記事項】 本県では 2004 年、江口一雄によって十和田市内のスギ林内から初めて採集された。
(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目ヌメリガサ科

D

和名 アケボノタケ

環境省：該当なし

学名 *Hygrocybe calyptriformis* (Berk.et Br.) Fayod.

【形態的特徴】 全体が淡いバラ~ライラック色をした美しいきのこである。傘は径 3~10cm、初め中央が尖った円錐状で、のち生長するに開くが、開いたのちも中心に円錐状の中丘がある。表面は繊維状でほとんど粘性はなく、成熟すれば縁部は深く裂ける。ひだは上生し幅広くやや疎。柄は長さ 6~15cm、幅 5~10mm、表面は粘性なく、ほぼ白色、多少縦線がありしばしばねじれ、中空。胞子は広楕円形、大きさは 6.5~7.5×4~5 μm、平滑。

【選定理由】 発生が比較的稀なため採集例が少なく、現在情報不足である。

【分布と生態の概要】 全国的に分布するが、本県では発生は比較的稀である。本県では夏~初秋、林内のコケ類が繁殖しているような草地に発生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 本県においては発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。また分布等の詳細な調査が必要である。

【特記事項】 本県では 1995 年に横沢利昭によって十和田市から初めて採集された。
(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目キシメジ科

D

和名 ホンシメジ

環境省：該当なし

学名 *Lyophyllum shimeji* (Kawamura) Hongo

[形態的特徴] キシメジ型をした中～大形の灰色のきのこであるが、ときに極めて大形のものもある。傘は径4～10cm、ときに18cm以上、初め半球形 - まんじゅう形、のち開いて平らとなり、表面は最初暗色でのちしだいにねずみ色となるか、または初めからねずみ色～淡灰褐色、縁部は初め内側に強く巻く。肉は白色、緻密、歯切れがよい。ひだは湾生またはやや垂生し、白～淡クリーム色。柄は長さ3～10cm、幅1～2cm、ときに長さ16cm以上、色は白色、通常下方はこん棒状に膨らむが、生長したものではほとんど上下同大となる。胞子紋は白色。胞子は球形、無色、大きさ径4～6μm、平滑。

[選定理由] 開発によるミズナラ雑木林の伐採など、環境の悪化により近年発生減少の傾向が見られるが、情報不足である。

[分布と生態の概要] 全国的に分布する。本県では夏～秋、ミズナラ林またはアカマツ・ミズナラ混生林内に発生する（工藤ほか, 1998）。

[生存に対する脅威と保存対策] 本県においては発生量の減少が見られ、環境の変化によって絶滅が危惧される。また発生状況等の詳細な調査が必要である。

[特記事項] 一般に傘の色により黒タイプと白タイプの二つに分けられるが、どちらも同一種と考えられている。

（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目キシメジ科

D

和名 ヤチナラタケ

環境省：該当なし

学名 *Armillaria nabsnona* Volk et Burdsall

【形態的特徴】 カヤタケ～キシメジ型をした小～中形のきのこ。傘は径3～5cm、初め中高の半球形、のち開いて平らとなり、さらに中央がくぼむが、中心は常に突出する、表面は粘性あり、黄～明黄褐色、中央に圧着した暗緑色繊維状細鱗片を被むり、周辺には明瞭な放射状の条線をあらわす。肉は白色。ひだはやや疎、白色、直生または多少垂生する。柄は細長く長さ5～8cm、幅3～7mm、下方に向かってやや膨らみ、上部はほとんど白色、下方に向かって黄褐色、ほぼ平滑。つばは白色、多少薄い膜状、消失性。担子器の基部にクランプをもつ。胞子は卵形～楕円形、無色、大きさ7～8.5×5～5.5μm、平滑。

【選定理由】 近年開発による湿原の減少等環境の悪化により、発生の減少傾向が見られる。

【分布と生態の概要】 日本のほか北アメリカに分布する。我が国では北日本に多いが北海道からの報告はまだない。本県では夏～初秋、湿地帯の種々の広葉樹の枯幹に発生する（工藤ほか,1998）。

【生存に対する脅威と保存対策】 本県においては発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。分布等の詳細な調査が必要である。

【特記事項】 本種は北アメリカから新種として報告された（Volk et al.,1996）。ナラタケ類の中でも傘の中央が突出する独特な特徴を持っている。

（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目キシメジ科

D

和名 ヒメムキタケ

環境省：該当なし

学名 *Hohenbuehelia reniformis* (G. Meyer:Fr.) Sing. .

【形態的特徴】 ヒラタケ型をした小形のきのこである。傘は径7～12mm、半円形～扇形、表面は帯褐ねずみ色で細かいビロード状を呈し、肉は2層よりなり、上層は灰色のゼラチン質、下層は白色の肉質。柄は傘に側生し、きわめて短くて淡灰褐色、基部に白毛があり、しばしば柄を欠き背着生。ひだは白～淡灰色、垂生し幅狭くやや密。胞子は円柱状楕円形、大きさ7.5～9.5×4～4.5μm、非アミロイド。厚壁シスチジアはひだの側部と縁部に多数存在し紡錘形、先端に被覆物がある。

【選定理由】 発生地域が限定されており、発生も比較的稀である。

【分布と生態の概要】 全国的に分布するが、本県での発生は稀である。本県では初夏、ブナの立ち枯れ木に群生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 発生基質および発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。また分布等の詳細な調査が必要である。

【特記事項】 本県では2003年に初めて青森市田代平から採集された（工藤,2005）。小形で乾燥に弱いいため、一般に見つけにくい。

（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目キシメジ科

D

和名 ニセシジミタケ

環境省：該当なし

学名 *Tectella patellaris* (Fr.) Murr.

[形態的特徴] 子実体は径1~2cm、丸山形で傘の一部が基質に付着し柄はほとんどない。傘の表面は鱗片状~網状、縁部はビロード状、黄土白色~赤褐色、湿っている時多少粘性がある。幼時傘の下部は膜質類白色のつばに覆われる。ひだは暗黄土色~褐色で密。肉は黄土色で硬い。

[選定理由] 発生基質および発生地域が限定されており、発生も比較的稀である。

[分布と生態の概要] 発生が稀で、全国的な分布状況は不明。本県では初秋~秋、ブナの枯れ枝に発生する。

[生存に対する脅威と保存対策] 発生地域が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。また分布等の詳細な調査が必要である。

[特記事項] 本県では1998年に十和田市蔦から初めて見つかっている(工藤ほか,1999)。小形で地味な色のため、一般に見つけにくい。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目キシメジ科

D

和名 ミヤマシメジ

環境省：該当なし

学名 *Lyophyllum nigrescens* Hongo

[形態的特徴] モリノカレバタケ型をした小形のきのこである。傘は径2~3cm、丸山形からのち開いて平たい丸山形、表面は暗灰色、傷つけたり古くなると黒く変色する。肉は薄い。ひだは上生または直生、疎、灰褐色、傘と同じように変色する。柄は長さ2~3cm、幅3mm程度、多少繊維状、傘と同色、中空、傘と同じように変色する。胞子は類球形~球形、大きさ4.5~6×4~5μm、平滑。

[選定理由] 発生地域が限定されており、発生も比較的稀である。

[分布と生態の概要] 現在、日本からだけ知られており、特産の可能性はある。国内では本県のほかに、東京都、神奈川県、滋賀県から発生の報告がある(Hongo,1976)。本県における発生時期は夏~秋で、スギの腐朽材上に発生する。比較的稀である。

[生存に対する脅威と保存対策] 発生基質および発生環境が限定されているため、開発による環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

[特記事項] これまで本県では江口一雄によって十和田市内の1か所で採集された。小形のきのこで、色も黒くなり目立たないため見逃されている可能性がある。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目キシメジ科

D

和名 オオモミタケ

環境省：該当なし

学名 *Catathelasma imperiale* (Fr.) Sing.

[形態的特徴] カヤタケ型をした大形のきのこである。傘は径10~35cm、初め半球形で縁は内側に強く巻き、のちまんじゅう形から平たい丸山形に開く、表面は黄灰褐色のち褐色~オリブ褐色、中央付近に不明瞭な鱗片がある、肉は緻密、白色、粉臭がある。ひだは柄に垂生、密、白色。柄は長さ15~25cm、ときにそれ以上、上部は極めて太く、幅は4~6cm、下方に向って細くなり、先端は根状。柄の上部には二重のつばをつける。胞子は長楕円形、大きさ10~15×4~5.5μm、平滑、アミロイド。

[選定理由] 過去の採集記録は詳細が不明であり、その後の報告がない。分布上学的に貴重な種である。

[分布と生態の概要] 北海道および本州に分布し、トドマツ、アオモリトドマツ、ウラジロモミなどの針葉樹林内に発生する(今関・本郷,1987)。本県における発生は稀で、分布や生態等は不明である。

[生存に対する脅威と保存対策] 今後、本県における分布等の詳細な調査が必要である。

[特記事項] 類似種にモミタケ *Catathelasma ventricosum* (Peck) Sing.があるが、子実体がより大形、胞子はより小さい点で違いがある。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目キシメジ科

D

和名 クロキツネタケ

環境省：該当なし

学名 *Laccaria nigra* Hongo

[形態的特徴] モリノカレバタケ型をした小形のきのこである。傘は径1~2cm、初め鈍頭円錐形からのち中高の平に開く、表面は吸水性、灰~帯褐灰色、中央部はほとんど黒色、湿っている周辺に時長い条線をあらわす。肉は薄く、傘表面と同色、多少アルカリ臭がある。ひだは柄に上生または直生、幅1~3mm、厚く、疎、灰色をおびる。柄は長さ2~3.5cm、幅1.5~3mm、多少繊維状、傘と同色、中空。胞子は球形、大きさ径8~9.5μm、表面はとげに被われている。

[選定理由] 分布上学的に貴重な種で、発生場所が限定されており、発生も稀なため採集例が少ない。

[分布と生態の概要] 現在日本だけで発生が知られており、日本特産の可能性はある。国内では本県のほかに、滋賀県から発生の報告がある(今関・本郷,1987)。本県では初秋、クリ林内の地上に発生する。

[生存に対する脅威と保存対策] 発生環境が限定されているため、開発による環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

[特記事項] 本種は小形で色が地味なため、一般採集者には目に付きにくい可能性がある。これまで本県では、八戸市の1か所から知られているだけである。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目キシメジ科

D

和名 ヒメムラサキシメジ

環境省：該当なし

学名 *Calocybe ionides* (Bull.:Fr.) Donk

【形態的特徴】 キシメジ型をした小形のきのこである。傘は径2~4.5cm、初めまんじゅう形からのち開いて平たい丸山形、表面は粘性なく平滑、暗紫~暗褐紫色、のち淡色となる。肉は帯紫白色。ひだは柄に上生~湾生し、密、白色。柄は長さ3~4cm、幅3~6mm、表面は繊維状、暗紫色、ほとんど中空。胞子は長楕円形、無色、大きさ5.5~8×2.5~3μm、平滑。

【選定理由】 発生地域が限定されており、発生も比較的稀である。

【分布と生態の概要】 全国的に分布するが発生は比較的稀である。本県では初秋~秋、針葉樹林樹下の地上に発生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 発生環境が限定されており、開発による環境の変化によって絶滅が危惧されるので、環境の保存が望まれる。

【特記事項】 本県ではこれまで青森市と八戸市から発生の報告がある。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目テングタケ科

D

和名 オニテングタケ

環境省：該当なし

学名 *Amanita perpasta* Corner et Bas

【形態的特徴】 ウラベニガサ型をした大形のきのこである。傘は径15cm程度、初めまんじゅう形からのち平に開き、淡黄褐色~淡褐色、表面には高さ2~5mmの円錐形~角錐形の褐色のいぼを散布し、いぼは周辺部では小形。肉は堅く、白色のち多少黄みをおびる。ひだは柄に離生、クリーム白色、密、縁部は粉状。柄は長さ12cm程度、幅約2cm、下部はこん棒状~紡錘状にふくらみ、傘と同色のち帯赤褐色、表面はほぼ輪状にならぶ小形で帯褐色の多数の鱗片におおわれ、中実。胞子は球形~類球形、大きさ7~8×6~7.5μm、平滑、アミロイド。

【選定理由】 過去の採集記録は詳細が不明であり、その後報告がみられない。

【分布と生態の概要】 南方系のきのここと思われ、日本のほかにマレーシア、シンガポールに分布し、本県以外では京都府、熊本県に発生するが稀である(今関・本郷,1987)。本県における分布および発生生態は詳かでない。

【生存に対する脅威と保存対策】 本県においては今後、分布等の詳細な調査が必要である。

【特記事項】 本県における採集記録は県立郷土館における展示会に持ち込まれた1標品のみである。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目ウラベニガサ科

D

和名 キヌオオフクロタケ

環境省：該当なし

学名 *Volvariella bombycina* (Schaeff.:Fr.) Sing.

【形態的特徴】 ウラベニガサ型をした大形のきのこである。傘は径 8～15cm、初め卵形～鐘形、のちまんじゅう形からほぼ平らに開く、表面は淡クリーム白色で微細な絹毛状の小鱗片に密におおわれ、粘性は無く、縁部はしばしばひだの端から多少突出する。肉は白色。ひだは柄に離生、密、初め白色のちに肉色。柄は長さ 6～12cm、幅 1～2cm、ほぼ白色、中実、根もとは少しふくらみ、基部に鱗片のある黄褐色の大きな膜質、袋状のつばをそなえる。胞子は卵形～楕円形、6.5～8×4.5～6μm。縁および側シスチジアはしばしば頂部に突起をそなえる。

【選定理由】 分布上学的に貴重な種であるが、発生が稀なため採集例が少なく、現在情報不足である。

【分布と生態の概要】 全国的に発生するが稀である。本県では初秋、広葉樹の枯木に発生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 本県においては発生は稀であり、今後、分布等の詳細な調査が必要である。

【特記事項】 近年の記録として 2005 年に笹孝が十和田市で撮影した写真があるものの、標本は現存しない。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目ハラタケ科

D

和名 シワカラカサモドキ

環境省：該当なし

学名 *Cystoderma neoamianthinum* Hongo

【形態的特徴】 ウラベニガサ型をした小形のきのこである。傘は径 2～4cm、初めまんじゅう形からのちほぼ平らに開き、表面は黄～黄土色の小粒に密に被われる。肉はほぼ白色、傘の部分では多少黄変する。ひだは上生、密、ほとんど白色。柄は長さ 2～6cm、幅 3～7mm、つばより上部はやや黄色を帯び粉状、下部は黄～黄土色の小粒に被われ、中実。つばは幅狭く、脱落しやすい。胞子は類球形～広楕円形、大きさ 3.5～4×2.5～3μm、平滑、弱アミロイド。

【選定理由】 発生環境が基質等によって限定されており、発生も比較的稀である。

【分布と生態の概要】 日本で新種報告されたきのこである(今関・本郷,1987)。これまで本県のほか、秋田県、石川県、奈良県、兵庫県から報告があり、発生は稀であるが広く全国に分布するものと思われる。本県では初秋、ブナの倒木に発生する(工藤ほか,1998)。

【生存に対する脅威と保存対策】 発生基質および発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。今後、分布等の詳細な調査が必要である。

【特記事項】 本県では、これまで十和田市からの採集記録があるだけである。類似種のシワカラカサタケ *Cystoderma amianthinum* (Scop.: Fr.) Fayod は針葉樹林の地上に発生し、傘の色は濃く、表面に放射状のしわがある点で違いがある。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目フウセンタケ科

D

和名 オオツガタケ

環境省：該当なし

学名 *Cortinarius claricolor* (Fr.) Fr. var. *turmalis* (Fr.) Moser

- [形態的特徴]** キシメジ型をした大形のきのこである。傘は径 6~12cm、初めまんじゅう形、のち開いて平たい丸山形、縁部は永く内側に巻く、表面は粘性があり、きつね色~橙褐色、平滑、周辺には白色綿毛状の被膜の破片を付着するが、のちしばしば消失する。ひだは柄に直生または上生、やや密、類白色のち黄土褐色。柄は長さ 8~15cm、幅 1.5~2cm、ほぼ円柱形、中央で多少膨らみ、白色、初め白色綿毛様の菌糸(外被膜)に密におおわれ、傘が開いたあとはつばとなって柄の上部に付着する。胞子は紡錘状楕円形、大きさ 8~10×3~5 μm、表面がいぼに被われる。
- [選定理由]** 分布的・上学的に貴重な種であるが、発生が稀なため採集例が少ない。
- [分布と生態の概要]** 日本では主にツガなどの針葉樹林に発生し、本州の亜高山地帯に多くみられるという。本県では秋、ブナ林内から採集されたのが唯一確実な記録である。
- [生存に対する脅威と保存対策]** 本県においては発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。今後、分布等の詳細な調査が必要である。
- [特記事項]** 日本ではツガタケ *Cortinarius claricolor* (Fr.) Fr.との区別が明確でなく、今後の分類学的検討が望まれる。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目イグチ科

D

和名 アカジコウ

環境省：該当なし

学名 *Boletus speciosus* Frost

- [形態的特徴]** 淡紅色の傘をした大形のきのこである。傘は径 8~12cm、初めまんじゅう形からのち開いて平たい丸山形、表面は平滑、湿ると多少粘性を帯び、バラ紅色でしばしば青色の染みがある。肉は厚く、淡黄色、空気に触れると明るい青色に変わる。管孔はほぼ離生、淡黄色のち粘土褐色、傷つくと青変する。孔口は微小で管孔と同色。柄は長さ 8~10cm、幅 1.5~2cm、下方に向かって太まり、基部で 2.5~3.5cm、しばしば基部付近で一方に曲がる、表面は細かい網目で被われ、淡黄色または多少バラ色、のち基部から上方に向かって暗ワイン色となる。胞子は円柱状紡錘形、大きさ 10~13.5×3~3.5 μm、平滑。
- [選定理由]** ミズナラ雑木林の伐採など、環境の悪化により近年減少の傾向が見られる。現在情報不足である。
- [分布と生態の概要]** 全国的に分布する。本県では夏~初秋、里山のアカマツの混じったミズナラなどの雑木林に発生する(工藤ほか, 1998)。
- [生存に対する脅威と保存対策]** ミズナラなどの里山二次林の保存が望まれる。また発生状況等の詳細な調査が必要である。
- [特記事項]** 八甲田のブナ林で傘のオリーブ色が強いタイプの発生がみられ、別種の可能性があるという(長沢栄史, 私信)。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目イグチ科

D

和名 アカエノキンチャマイグチ

環境省：該当なし

学名 *Leccinum aurantiacum* (Bull.) S.F.Gray

[形態的特徴] 中～大形のきのこである。傘は径 8～12cm、初め半球形からまんじゅう形、のちほぼ平らに開く、表面は湿るとやや粘性があり、橙茶褐色、多少綿毛状～圧着した繊維状。傘の縁には管孔部から 3mm ぐらい突出して垂れ下がった縁膜片がある。肉は淡黄白色、空気に触れると淡青緑色から灰色に変わる。管孔は汚黄白色～黄灰色。孔口はかなり小形で管孔と同色。柄は長さ 7～14cm、幅 1.5～2cm、上下同大、中実。表面は汚黄白色の地に、淡褐～茶褐色の、やや粒状～ささくれ状の細鱗片を密生し、またときに不明瞭な網目模様を表す。胞子は長紡錘形、大きさ 14～16.5×4～5 μm、平滑。

[選定理由] 分布上学術的に貴重な種であるが、発生が稀なため採集例が少なく、情報不足である。

[分布と生態の概要] 本県以外での分布は不明。本県では初夏～初秋、ヤマナラシの樹下に発生する。

[生存に対する脅威と保存対策] 本県においては発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。今後分布等の詳細な調査が必要である。

[特記事項] これまで、本県における採集記録は青森市からの 1 例だけである(工藤ほか, 1998)。類似種にキンチャマイグチ *Leccinum versipelle* (Fr.) Snell があるが、傘が繊維状で柄の鱗片が茶褐色である点で違いがある。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目ハラタケ科

D

和名 カワキタケ

環境省：該当なし

学名 *Panus torulosus* (Pers. :Fr.) Fr.

【形態的特徴】 カヤタケ～ハラタケ型をした中形のきのこ。傘は径 4～10cm、窪みの浅いウス形～ややロート形をし、上から見た形はほぼ円形～じん臓形、縁は不規則に波打ち、初めは内側に巻く、表面は初めわずかに微毛をおびるが、のち無毛平滑またはときに裂けて圧着した鱗片状となり、初め褐紫～赤褐色、のち黄褐～肉褐色。肉は白色、強靱。ひだは垂生、初めはほぼ傘と同様の色をおびるがのち淡黄褐～にぶい橙色。柄は中心生、偏心生、または側生、一般に太短い。表面は紫灰～淡黄褐色で細軟毛を密生する。胞子紋は白色。胞子は円柱状長楕円形、無色、大きさ 5～6.5×3～3.5 μm、平滑。厚壁シスチジアを持つ。

【選定理由】 発生環境が基質等によって限定されており、発生も比較的稀である。

【分布と生態の概要】 全国的に分布することが知られているが、発生は比較的稀である（今関・本郷, 1987）。本県では夏～秋、ブナなどの広葉樹の枯幹や切株に発生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 発生基質及び発生環境が限定されているため、開発による環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

【特記事項】 本県における発生場所は十和田市蔦周辺が主であるが、採集報告は極めて少ない。本種がハラタケ型に発達した傘を持つ場合、同定が難しく、そのことも採集報告が少ない一因と考えられる。

（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目ハラタケ科

D

和名 ニオイカワキタケ

環境省：該当なし

学名 *Panus suavissimus* (Fr.) Sing.

【形態的特徴】 カヤタケ型をした小形のきのこである。子実体はサンショウに似た特有の香りをもつ。傘は径 1.5～4cm、ロート形またはときに貝殻形、卵黄～淡黄色、表面は無毛で平滑、傘の縁部は多少内側に巻く。ひだは柄に垂生、やや密、類白色～淡クリーム色、縁は鋸歯状。柄は短く、中心生または著しく偏心生、しばしば全面にわたり、または基部でレンガ色をおびる。胞子紋は淡黄土色。胞子は円柱形、大きさ 6～7×2.5～3 μm。

【選定理由】 発生環境が基質等によって限定されており、発生も比較的稀である。

【分布と生態の概要】 日本のほかにヨーロッパおよび北アメリカに分布する。国内では本県のほかに、静岡県、鳥取県で発生が確認されている（今関・本郷, 1987）が、日本での発生は極めて稀である。本県では初秋、ミズナラの枯木に発生する。

【生存に対する脅威と保存対策】 全国的に発生は比較的稀である。発生環境が限定されているため、開発による環境の変化によって絶滅が危惧され、環境の保存が望まれる。

【特記事項】 本県ではこれまで、青森市月見野で確認されているのみで、採集報告は極めて少ない。

（原田幸雄・工藤伸一）

ハラタケ目キシメジ科

D

和名 ツチヒラタケ

環境省：該当なし

学名 *Hohenbuehelia geogenia* (DC.:Fr.) Sing.

[形態的特徴] ヒラタケ型～カヤタケ型をした小～中形のきのこである。傘は径2～6cm、舌状、へら形、ロート形で、縁は最初内側に巻く、表面は平滑、暗黄褐色、表皮は幾分ゼラチン状。ひだは柄に長く垂生、類白色～黄土色、やや密。柄は長さ、幅とも1cm程度、偏心生、類白色。胞子は楕円形、平滑、大きさ7～7.5×3.5～4μm。厚壁シスチジアをもつ。

[選定理由] 分布上学的に貴重な種であるが、発生が稀で採集例が少なく、情報不足である。

[分布と生態の概要] 全国的に分布するが、発生は比較的稀である。本県では秋、林内の草の多い地上または落葉広葉樹の腐朽木上に発生する。

[生存に対する脅威と保存対策] 本県においては発生地が限定されており、発生が稀である。今後、分布等の詳細な調査が必要である。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目ヒゲハタケ科

D

和名 コゲチャヒロハアンズタケ

環境省：該当なし

学名 *Hygrophoropsis bicolor* Hongo

[形態的特徴] カヤタケ型の中形のきのこである。傘は径2.5～6cm、初めまんじゅう形から平らに開きついに浅いロート形になり、縁部は不規則に波打つ、表面は橙色をおびた暗褐色で、乾燥し、細かいピロード状。肉はほぼ白色で軟らかく、特有のにおいがある。ひだは柄に長く垂生し、幅狭く、鮮橙色、密、くりかえし二又に分かれる。柄は長さ1.5～2.5cm、幅4～6mm、やや偏心性、中空、表面はややピロード状または平滑で、橙色あるいはやや暗褐色。胞子紋は白色。胞子は類円柱形、大きさ4.5～7×2.5～3μm、平滑。

[選定理由] 分布上学的に貴重な種であるが、発生が稀で採集例が少なく、情報不足である。

[分布と生態の概要] 日本特産でアカマツの朽木上に発生するという。本県のほか滋賀県で発生が確認されている(今関・本郷, 1987)。本県では採集場所が確認されず、生態は不明である。

[生存に対する脅威と保存対策] 本県においては発生が稀であり、環境の変化によって絶滅が危惧される。今後、分布等の詳細な調査が必要である。

[特記事項] 類似種のヒロハアンズタケ *Hygrophoropsis aurantiaca* (Wulf.:Fr.) Maire は傘がくすんだ淡橙色をしており地上生である点で違いがある。

(原田幸雄・工藤伸一)

ハラタケ目ベニタケ科

D

和名 アカモミタケ

環境省：該当なし

学名 *Lactarius laeticolorus* (Imai) Imazeki

- [形態的特徴]** カヤタケ型をした中形の橙色のきのこである。傘は径 4～10cm、初め中央がくぼんだまんじゅう形からのち開いてややロート形となり、縁部は永く内に巻く、表面は幼時淡橙朱色、やや濃色で不明瞭な環紋を生じる。肉は淡橙色で傷口より橙朱色汁を多量に分泌し、変色なく無味無臭。ひだは直生～やや垂生、幅狭く、密、傘より濃色、ときにわずかに緑色を帯びる。柄は長さ 3～7 cm、幅 1～2cm、中空、下方にやや細まり表面傘と同色でところどころ濃色な浅いくぼみがある。胞子は広楕円形、大きさ 7.5～10×6～7.5 μm、表面に網目がある。
- [選定理由]** 発生環境が限定され、発生が比較的稀である。
- [分布と生態の概要]** モミ属の樹下に発生し、全国的に分布する。本県では初秋、植林のモミ樹下やアオモリトドマツの樹下に発生し、青森市で採集されている。
- [生存に対する脅威と保存対策]** 今後、分布等の詳細な調査が必要である。
- [特記事項]** 類似種のアカハツ *Lactarius akahatsu* Tanaka は肉に傷を付けると青緑色の染みができることで違いがある。

(原田幸雄・工藤伸一)

ヒゲナシタケ目ホウキタケ科

D

和名 ホウキタケ

環境省：該当なし

学名 *Ramaria botrytis* (Pers. :Fr.) Ricken

- [形態的特徴]** サンゴ形をした中～大形でワイン色のきのこである。子実体は幅 3～5cm の太い白色の円柱状の柄からしだいに上方に枝を分け、先端部はおびただしい小枝の集合となり、ハナヤサイ状となる。全体の大きさは高さ 15cm、径 15cm 以上に達する。小枝の先端部は淡紅～淡紫色。胞子紋は黄土色。胞子は長楕円形、大きさ 14～16×4.5～5.5 μm、表面に縦のすじ模様を帯びる。
- [選定理由]** ミズナラ雑木林の減少など、環境の悪化により発生減少の傾向が見られる。また情報不足である。
- [分布と生態の概要]** 全国的に広く分布する。本県では初秋～秋、里山のミズナラなどの雑木林に多く発生する(工藤ほか, 1998)。
- [生存に対する脅威と保存対策]** ミズナラなどの里山二次林の保存が望まれる。今後の詳細な調査が必要である。
- [特記事項]** *Ramaria* (ホウキタケ) 属は変異が多く、分類の困難なグループである。

(原田幸雄・工藤伸一)

ヒダナシタケ目サルノコシカケ科

D

和名 エツキヒメサカズキタケ

環境省：該当なし

学名 *Calyprella capula* (Holmsk.: Pers.) Quél.

[形態的特徴] 子実体はワイングラスを伏せたようなフウリン状の極めて小形のきのこである。傘は径2~5mm、椀状~ロート状、深さ2~7mm、椀の内面、外面ともに平滑で、白色~クリーム色、内面に子実層が形成される。柄は長さ2mm程度、幅1mm以内、白色。胞子は楕円形、大きさ6~9×3.5~4.5μm、平滑。

[選定理由] 発生地域が限定されており、発生も比較的稀である。また県内の分布情報も不足である。

[分布と生態の概要] 発生が比較的稀で、全国的な分布は不明である。本県では初夏、ブナの立ち枯れ木上に群生する。

[生存に対する脅威と保存対策] 本県においては発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。

[特記事項] 本県では2003年に青森市田代平で初めて採集された(工藤,2005)。極めて小形のきのこで、乾燥に弱いため、なかなか発見ができない。今後の詳細な調査が必要である。

(原田幸雄・工藤伸一)

ヒダナシタケ目サルノコシカケ科

D

和名 ヒトクチタケ

環境省：該当なし

学名 *Cryptoporus volvatus* (Peck) Shear

[形態的特徴] 子実体はクリの実またはハマグリ形、生のときには乾魚臭がある、上面は丸山形、下面はほぼ扁平、大きさ2~4×1~2.5cm、厚さ1~2.5cmほど。表面は黄褐色~くり色、ニス状の物質をこすり、粘りがあり、乾けば光沢が現れ、平滑。肉は白、革質~コルク質。傘の下面は革質の被膜をこすり、傘のつけ根に近い部分に楕円形の穴があき、管孔部が外気と通じる。管孔は長さ2~5mm、孔口は3~5個/mm。胞子は長楕円形、大きさ10~13×4~6μm、無色平滑。

[選定理由] 生態上学的に貴重な種であるが、本県での発生は稀で採集例が少ない。

[分布と生態の概要] 針葉樹の枯木に発生し、全国的に分布するが、本県では発生は稀である。本県における発生時期は春、アカマツの枯木上に生じる。

[生存に対する脅威と保存対策] 本県においては採集例が限られており、今後、分布等の詳細な調査が必要である。

[特記事項] 近年、青森県郷土館に標本が持ち込まれ、ようやく本県にも発生することが分かったが、これまでのところ採集は青森市からだけである。過去に報告がなかったことから、本県への侵入種の可能性がある(長沢栄史,私信)

(原田幸雄・工藤伸一)

ヒダナシタケ目マンネンタケ科

D

和名 ツガノマンネンタケ

環境省：該当なし

学名 *Ganoderma valesiacum* Boud.

【形態的特徴】 扇形をした大形のきのこである。傘は半休形～扇形～じん臓形、幅 10～25cm、厚さ 1～4cm、表面は初め黄色、しだいに赤褐色からほとんど黒くなり、うるし状の光沢があり、環紋をあらわす、肉はコルク質で、上半は材白色、下半は淡いにつけい色。管孔は長さ 1～1.5 cm、孔口面は初め類白色のち帯緑黄白色。柄は傘の横にほぼ水平に伸び、長さ 2～4cm、幅 2～3cm、表面は傘と同じであるが、ときに柄をもたない。胞子は卵形で二重の膜をこうむる（マンネンタケ型）、大きさ 10～12×6.5～7.2 μm。

【選定理由】 学術的に貴重な種であるが、発生が稀なため採集例が少ない。環境の変化によって絶滅が危惧される。

【分布と生態の概要】 山岳地帯や北方に多く分布し、モミ・ツガなどの針葉樹の枯木や倒木上に発生する。本県での発生場所等生態は不明である。

【生存に対する脅威と保存対策】 本県においてはこれまで採集例が稀であり、今後、分布等の詳細な調査が必要である。

【特記事項】 新山正俊によって県産標本が提供され、工藤伸一の手元に保管されている。

（原田幸雄・工藤伸一）

ヒダナシタケ目カンゾウタケ科

D

和名 カンゾウタケ

環境省：該当なし

学名 *Fistulina hepatica* Schaeff.:Fr.

【形態的特徴】 舌形をした赤い大形のきのこである。傘は扇状～へら形または舌状、つけ根は狭まり短柄状または無柄、大きさは幅 20cm、厚さ 5cm 余りに達する。表面は濃い赤紅～暗赤褐色、微細なつづ状。肉は血紅色で獣の肉に似た赤白色の筋模様を表し、血液状の赤い汁を含んで柔軟、酸味を帯びる。傘の下面は黄色～淡紅色、古くなると暗赤色。子実層は円筒状の管が密にならび、管は長さ 5～10 mm、太さは 4～5 本/mm、黄白色であるがこすったり古くなると赤褐色になる。菌糸は 1 菌糸型、クランプがある。胞子は卵形、薄膜、大きさ 4～5×3 μm、非アミロイド。

【選定理由】 過去に発生が確認されているものの、その後発生がほとんど確認されていない極めて稀なもので、環境の変化によって将来絶滅が危惧されるもの。

【分布と生態の概要】 ブナ科の樹木に発生し、日本全土に分布するといわれているが、樹種は主にシイであることから、本県では発生が稀である。本県における発生時期は秋で、広葉樹の樹幹の根際に発生。

【生存に対する脅威と保存対策】 発生場所が限定されており、ほとんど発生が確認されていないため、環境の変化によっては絶滅が危惧され、良好な環境の保存が望まれる。

【特記事項】 関東以西の西日本に多く発生が見られ、温帯系のきのこと思われる。

（原田幸雄・工藤伸一）

ホコリタケ目ホコリタケ科

D

和名 トゲホコリタケ

環境省：絶滅危惧 類

学名 *Bovista yasudae* Lloyd

[形態的特徴] 団子形の小形のきのこである。子実体は球形あるいは偏球形、基脚部は狭小になり根状束に連なり、直径 1.8~2.8 cm、高さ 1.5~2.2 cm。外皮は淡褐色で暗褐色の刺を持ち、刺の先端は湾曲するが、老時脱落して円痕となる。胞子は球形、淡褐色、大きさ径 4~5 μm、細い柄を持つ。

[選定理由] 国の絶滅危惧種 (VU) (環境庁, 2000) で、発生地には本県があげられているが、現在県内の発生地が確認できず情報不足である。

[分布と生態の概要] 林内地上に発生し、本県のほかに北海道、宮城県に分布する (環境庁, 2000)。本県における発生時期や生態は不明である。

[生存に対する脅威と保存対策] 本県においてはほかに確実な発生記録がなく、今後、分布等の詳細な調査が必要である。

[特記事項] 日本特産種。

(原田幸雄・工藤伸一)

シロキクラゲ目シロキクラゲ科

D

和名 シロキクラゲ

環境省：該当なし

学名 *Tremella fuciformis* Berk.

[形態的特徴] 花びらのかたまりのようなきのこである。子実体は樹皮の裂け目より、単生あるいは重なり合った花弁状に生じ、径 10cm、高さ 5cm 程度の不規則なとさか状裂片の集まりとなる。肉は硬いゼラチン質~膠状軟骨質、純白色。裂片の外縁部は波状あるいは不規則に切れ込み、表面は平滑、両側面に子実層を発達させる。湿時はゼラチン質だが乾燥時は硬い軟骨質に収縮する。胞子は垂球形~倒卵形、無色、大きさ 6~9.5×5~7 μm。

[選定理由] 分布上学的に貴重な種であり、本県でもようやく発生が確認されたが、まだ情報不足である。

[分布と生態の概要] 温帯、熱帯地方に広く分布するきのこである。本県では初夏、ブナの枯木に発生する。

[生存に対する脅威と保存対策] 本県においては発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。今後、分布等の詳細な調査が必要である。

[特記事項] 本県では、2002 年八甲田で初めて採集された (工藤, 2005)。これまで類似種の存在は知られていたが、本種の確実な採集記録はなかった。

(原田幸雄・工藤伸一)

チャワンタケ目アミガサタケ科

D

和名 テンガイカブリ

環境省：該当なし

学名 *Verpa digitaliformis* Pers.: Fr. var. *digitaliformis*

〔形態的特徴〕 有柄で頭部が釣鐘形をした中形のきのこである。子実体は有柄で高さ 5～10cm。頭部は長さ 3～4cm、幅 2～3cm、帽子形～鐘形で柄にかぶさるように発達し、縁は柄に離生する、表面はほぼ平滑、黄土褐色～褐色。柄は円筒形、中空、表面は淡黄白色、うろこ様のしわがある。子実層は頭部の全表面に生じ、子嚢は 8 個の楕円形の子嚢胞子を有する。胞子は楕円形、無色、大きき 19～30×10 - 16 μm、平滑。側糸は糸状、分岐し、先端はやや膨らむ。

〔選定理由〕 分布上学的に貴重な種であるが、発生が稀なため採集例が少ない。

〔分布と生態の概要〕 全国的に広く分布するが発生は比較的稀である。本県では春、草原や林内地上に群生する。

〔生存に対する脅威と保存対策〕 本県においては発生地が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。今後、分布等の詳細な調査が必要である。

〔特記事項〕 頭部が円錐形で柄が平滑なものを変種ズキンカブリ *Verpa digitaliformis* Pers.:Fr. var. *conica* Imai とするが、今後分類学的検討が必要である。オオズキンカブリ *Ptychoverpa bohemica* (Kimbrough) Boud. は本種に似るが、頭部表面に著しいしわがあり、子嚢が 2～4 胞子性である。
(原田幸雄・工藤伸一)

塊菌目イモタケ科

D

和名 イモタケ

環境省：該当なし

学名 *Terfezia gigantea* Imai

〔形態的特徴〕 子嚢果は土中に生じ類球状～楕円体状、ジャガイモのような形をしたきのこである。大ききは 5×5×6cm 程度、色は淡黄～帯褐橙色、表面は凹凸で、大小の低い疣があり粗面、成熟するとしばしば亀裂を生じる。内部には菌糸で仕切られた類球形などの小室があり、この中に子嚢が不規則に散在する。小室の色は初め類白色、のち黄褐色～暗褐色となるが、小室を仕切る菌糸は無色のままで、まだら状となる。子嚢は類球形、広楕円形あるいは倒卵形、しばしば短い柄があり、2～8 個の子嚢胞子を生じる。子嚢胞子は球形、初め無色のち褐色をおび、大ききは径 32～55 μm、厚膜で密に刺状突起を生じ、膜の厚さ 2～4 μm。胞子内部には顆粒状の小油球が含まれる。側糸は存在しない。

〔選定理由〕 近年発生が確認されているものの、発生は極めて稀である。

〔分布と生態の概要〕 日本のほかに北アメリカに分布(今関・本郷, 1989)し、国内では北海道、本州に分布する。本県では秋、ブナ、ミズナラ林内の林道脇など土が露出したところの地中に発生する。

〔生存に対する脅威と保存対策〕 発生環境が限定されているため、今後の環境の変化によっては絶滅が危惧される。

〔特記事項〕 本県では川口金次郎氏によって、2005 年初めて旧上北町で採集された。地下生のきのこは調査が不十分で、今後の詳細な調査が必要である。
(原田幸雄・工藤伸一)

引用文献

- Fukuda, M., Nakashima, E., Hayashi, K., and Nagasawa, E., 2003, Identification of the biological species of *Armillaria* associated with *Wynnea* and *Entoloma abortivum* using PCR-RFLP analysis of the intergeneric region (IGR) of ribosomal DNA. *Mycol. Res.*, 107, p1435-1441.
- 本郷次雄 1974, 日本産きのこ類の研究 (21). 植物研究雑誌, 49, p294-305.
- Hongo, T., 1976. *Notulae mycolpogicae* (14). *Mem. Shiga Univ. Nat. Sci.*, 25, p26
- 今関六也 1943, まひたけ属 *Grifola* S.F.Gray 東亜産さるのこしかけ科(其一). 植物研究雑誌, 19, p381 - 390 .
- 今関六也・本郷次雄 1987, 原色日本新菌類図鑑 . 保育社, 325 pp.
- 今関六也・本郷次雄 1989, 原色日本新菌類図鑑 . 保育社, 315 pp.
- 環境庁 2000, 改定 日本の絶滅のおそれのある希少野生生物 植物 (維管束植物以外) . 自然環境研究センター, 429pp.
- Kobayasi, Y., 1954, Sphagnicolous Fungi found in Ozegahara Moor. *Sci. Res. Ozegahara Moor*, 558 pp.
- 工藤伸一 2004, 日本新産種 *Hygrocybe canescens* について. 日本菌学会 47 回大会講演要旨集 , p27.
- 工藤伸一 2005, 八甲田ブナ帯の高等菌類について . 甲蕈塾研究報告, 30pp.
- 工藤伸一・原田幸雄・山中勝次 1999, 1998 年日本菌学会採集菌類目録. 日本菌学会会報, 40, p79-83.
- 工藤伸一・大谷吉雄・長沢栄史 1994, 日本新産種 *Ionomidotis irregularis* (クロムラサキハナビラタケ) について. 日本菌学会第 38 回大会講演要旨集, p62.
- 工藤伸一・手塚豊・米内山宏 1998, 青森のきのこ. グラフ青森, 288 pp.
- Miller, O.K.Jr., Volk, J. and Bessette, E., 1996, A new genus, *Leucopholiota*, in the Tricholomataceae (Agaricales) to accommodate an unusual taxon. *Mycologia*, 88, p137-139.
- Nagasawa, E., 1995, A new poisonous species of *Boletus* from Japan. *Rept. Tottori Mycol. Inst.*, 33, p1-6.
- Nagasawa, E. and Readhead, S.A., 1988, A new edible agaric from Japan: *Clitocybula esculenta*. *Rept. Tottori Mycol. Inst.*, 26, p1-5.
- 長沢栄史・有田郁夫 1998, *Hypsizygus ulmarius* (シロタモギタケ) および *H. marmoreus* (ブナシメジ) について. 菌蕈研究所研究報告, 26, p71-78.
- 長沢栄史・工藤伸一 1992, 日本新産種 *Creolophus cirrhatus* (フサハリタケ 新称) について. 菌蕈研究所研究報告, 30, p69-74 .
- 長沢栄史・工藤伸一 2003, 青森県で再発見された *Armillaria ectypa* について. 菌蕈研究所研究報告, 41, p26-34.
- 大谷吉雄 1982. 興味深い日本産チャワソタケ 2 種について. 日本菌学会会報, 23, p379-381.
- Volk, T.J., Burdsall, H.H. Jr. and Banik, M.T., 1996, *Armillaria nabsnona*, a new species from Western North America. *Mycologia*, 88, p484-491.